

0 ri 0 n

KOKKO BOOKS



Origin

a novel

I

夏休みの人気ないキャンパスを一人の教授が早足で進んでゆく。左に曲がつて勢いよく進み、また曲がつた。あまりに急に曲がつたので、新しい本を積んだ台車にぶつかつた。本を両手に抱え運んでいた若い店員は、舌打ちしながらぐらつく台車を片足で止めた。が、荷台を揺らしたのがあの教授だと気がつく、慌てて教授の足元に視線を向けた。そして右手の人差し指を右のこめかみに軽くあてた。同時に支えを失つた何冊もの本が音をたてて彼の足元に落下した。店員は、「痛つてえ」と呻き、「なんだよ。外れかよ」と文句を言いながら本を拾い上げる。教授はその様子を一瞥すると前へ向き直り、再び猛スピードで歩き始めた。

教授は淡い茶色の髪の毛を柔らかな湯気のように立ち昇らせ、颯爽と進む。しわくちゃなジャケットの下には濃いネイビーのポロシャツがのぞく。別にこれ、ベージュの麻のジャケットだから皺だらけなのではない。コットンでもツィードでも、ブルーでもイエローでも、教授のジャケットはいつだってしわくちゃだ。ところがインナーのポロシャツはネイビー一辺倒で、襟は糊付けされているかのようにいつもピシッとしている。ボトムスはというと、チャコールグレー

のストラックスだからわかりにくい、くたびれた印象はなく、寧ろ新しく見える。丈が短く、柄物の靴下が顔を出し、足元はタッセルが古めかしいローファーだ。教授は家でも研究室でも、ジャケットは脱いだら脱ぎっぱなしで、ハンガーにかけるときもクリーニングに出すこともしなければ、床とベッドの隙間に入り込んだり、犬が自分の寢床に隠したりしても気にしない。そのくせ、どこに何を放置しているか把握しているから、気候や気分に合うジャケットをいつでもすぐに引っぱり出せる。皺には一切関心がない。では、なぜポロシャツとストラックスが新品同様なのかと言えば、両方とも捨てる時にしか脱がないから。加えて、教授はとても姿勢が良い。というのも、すでに何十年も前から指摘されている「人間の頭部の位置の低下」を心配した両親に口やかましく育てられた。いちいち注意されていては勉強の妨げになると、文句を言われぬよう、幼かった教授自ら徹底して背筋を直すことを習慣にした。結果、バレエダンサー顔負けの美しい姿勢を身につけた。だからヨレつとすることなどない。教授にとっては着替えるも無駄なこと。一定期間着て、他人に不都合（つまり悪臭）が生じ始める直前に、新しいポロシャツとストラックスにとりかえる。本当はどちらも半永久的に形状記憶加工されているから洗濯すればよいのだが、服を選択する時間さえ惜しい教授には洗濯の時間などもつてのほか。ネイビーとチャコールグレーとワンパターンなもの、時間の節約はもとより、汗をかいても、ケチャップが飛んでも、ほとんど目立たないからだ。

教授が左に曲がると、靴のタッセルが勢いよく跳ね、三階建ての講義棟が姿を現した。

今日から五日間、教授はこの棟にある階段教室で夏休みの特別講義を行う。大きなスクリーンで映像を流すことができるこの教室は教員に人気が高い。学生全体を見渡せるとか、教える側と教わる側という立場の違いが明確になるとか、そんな理由で好む者もいたが、この教授の場合には単にスクリーンを使いたいからだ。教授は当初、映像を頻繁に流すことから、少数精鋭の学生のみが受講できる毎週の講義でもこの教室を使おうと考え、一番乗りで予約をした。ところが、先着順のはずが、事務局から通常講義では貸し出せないと出禁をくらった。

すでに教室は最前列から最後列まで、多くの学生で騒めいていた。

『異種星命体間における翻訳の現在地——感覚共有システム実装までのカウントダウン』と銘打ったこの講義は、夏休み中といえども分野の第一人者による特別講義とあって、申込者が殺到した。いま教室にいるのは、運よく抽選に当たった二〇名の学生だけのはずだ。これほど人気があり、業績も申し分ないというのに、大学事務局はいまなお教授にこの講義室を使わせることを快く思っていないらしい。教室の至る所に【教授の写真撮影は禁止】【受講者以外は即退室のこと】【受講者以外の入室は自動で記録されています】と警告を発している。

けれどそれも仕方のないことだ。

教授が姿を現すと、学生たちは一斉にその足元に注目した。と同時に、あちこちの机の間か

らひょっこりと顔が現れ、教授の足元に目を凝らした。そして、皆一斉に、さっきの若い店員よろしく右手の指を右のこめかみにあて、写真を撮った。タイミングを逃したり、前の頭が邪魔して見えなかったりした者は、教授が椅子に座り、脚を組んだ瞬間を狙った。無事写真に収めたら、こめかみを二度タップして各自のメモリに保存する。見たい対象がちらっとでも目に映りさえすれば、精細な写真が撮影される。もちろん靴下だから保存されるのであって、足首や臀部、大胸筋であれば、本人の同意がない限り自動で削除される。

あの店員と学生たちが違うのは、結果をすぐに確認しないこと。今日の靴下が当たりかどうかは講義の後に確認するらしい。恣だ、学問だ、就職先だと忙しい若者たちだが、警告は無視しても、講義をおろそかにするつもりはないようだ。ほとんどの学生は臨戦態勢に入ったが、警告ブザーが鳴り、ひょっこり顔を出していた十二、三名の若者たちは、「俺、はずれたわ」「わたしも」と、頭上から赤いビームで照らされて教室から出ていった。

靴下占いに熱狂する若者を教授がどう思っているのはわからない。彼にしたら、ただ靴下を履いているというだけのこと。確かに、この靴下を履ける人間、いや人間に限らず星命体は極めて少ない。だからと言って、そこに「幸運」を見出す連中が現れるとは、教授をはじめ誰も思ってもみなかった。

古めかしいタッセルシューズとチノパンの間に時折のぞく柄物の靴下、それはとある地球外

星命体からの贈り物だ。

教授のもとには、時折、まとめて何足かの靴下が届く。送り主の星命体は自ら靴下を織る。

だが、宇宙中に売りさばいているのではなく、恩を感じた相手に、あくまでも友好の印として靴下を贈るという習慣をもっている。この靴下の星命体は視覚を持たない。だから長い間、己がどんな見た目をしているのかを知らなかった。ところが、あらゆる星命体が宇宙を行き交うようになり、他の星命体と交流するうち、自分たちの外見の特徴を指摘されるようになった。

様々な星命体に「人間に似ている」と言われたのだ。当の人間たちも「酷似している」と驚いた。しかし、そう言われてもこの星命体には目がないから、それが本当かどうか確かめることができない。かれらと人間とは、実際よく似ている。頭のとっぺんからつま先まで、これほど人間に似ている星命体は他にいない。目もあり、瞳があり、瞼もある。しかし視力はない。つまり「目」といっても、人間のそれとはまったく別ものだ。かれらは自分たちを見ることはできないが、己の姿かたちを物質に表出させる能力がある。かれらはお礼の品に靴下を作り、そこに自分たちの顔を映し出すという謎のスタイルを確立した。そもそもなぜ靴下か。かれらは足を体のなかで最も大切にする。かれらはかつての地球の半分くらいの大きさの惑星に住んでいるが、徒歩以外の一切の移動手段を持たない。最も大切な足、それを守るものが靴下で、そこに自分たちの姿かたちを織りこむことで、同じように歩いて移動する星命体に自分たちを身

近に感じてもらえるようにと、靴下をつくることにした。歩行しない、あるいは靴下が必要な星命体にはちがう物を贈っているらしい。

人間向けの靴下の製作当初、かれらは最も平面になる、つまり足の裏にあたる部分に顔を織り込もうとした。織り込まれた顔の表情が安定するからだ。が、物言いがついた。

「あなたたちを踏みつけるだなんてとんでもない。それに、せっかく魅力的なその顔が足裏にあつては誰にも見てもらえないじゃないか。側面、そして左右どちらにも見えるように織りあげるべきです」

と声を上げたのがこの教授で、以来、この星命体は教授を一層篤くもてなすようになった。

その頃、すでに教授は異星命体の言語・表現研究のリーダーとして広く知られていた。彼の功績と贈られてくる靴下は一時メディアに頻繁に取り上げられた。ある報道にあった一文、

「その星命体は人間と酷似している。宇宙のどこかに、あなたに瓜二つの異星命体がいるかもしれない」

が一人歩きし、いつの間にか、自分そっくり、あるいは誰かにそっくりな靴下を見つけると幸運が訪れるという噂が若者を中心に広まった。背景には、この星命体はかつて人間も虜になった占星術の産みの親の近縁ということがある。それに、靴下を贈られている人間はこの教授ただ一人。懐古主義そして稀少性から、神秘はいとも簡単にひねり出された。事実、自分にそっ

くりな靴下を目にした女性は、絶対に移住できないとされていた惑星で酸素を思う存分吸ってハイになって自給自足しているというし、友人の三つ子の姉妹にそっくりな靴下を目撃した芸術家は、宇宙展のディレクターに抜擢されるという好機に恵まれた。

人間で唯一この靴下を履いているということが、教授の業績を証明している。大学もそれは十分理解している。十六クラブに加入できない星命体と友好関係を築けるのは、並外れた知識と経験、そして相手を知ろうとする熱意があるからこそ。とはいえ、占いが過熱し、学生はもちろん、学外からの侵入者や仕事そっちのけで教授の足元を凝視してしまう職員たちがこれ以上増えることを大学本部は懸念していた。

ちなみに、ジャケットは放り投げ、ポロシャツとスラックスは着の身着のままという教授だが、余程の数の靴下が届くのか、足元だけはいつも違う顔を見せる。某靴下占い中毒者によると、同じ靴下を履くことは極稀にあるが不規則で、しかも種類は増えてゆくので、いつどれか顔を出すかはどんな占星術をもってしても占うことができないのだという。

教授が脚を組んでも姿勢は崩さず、虚空を見つめ微動だにしないまま、四分が過ぎた。しかし靴下占いの結果を急ぐ学生はいない。寧ろ、前方のスクリーンを警戒し、教授の第一声を待ち構えている。実は教授、授業開始後すぐに小テストをおこなうと学生たちに事前通知していた。

五分経ったところで、教授はやおら立ち上がり、演台に何冊かの本やノートを並べるとケールの捻じれを直しながら話はじめた。

「今日から五日間、異種星命体、つまりこの宇宙に存在する人間以外の生命体、かれらと私たちのコミュニケーションをより一層スムーズにするために、既存のシステムをどう改善していくのかというテーマで特別講義をおこなう。みんな知ってのとおり私の専門は言語学。だが、目下の研究課題は言語から離れ、人間の感覚をどうやって異種星命体と共有するか、そのシステムの構築だ。もちろん、その逆も然り。相手は有しているが人間にはない感覚をどう共有するのか」

教授は教壇を降りると、教室中央の階段を昇り、窓際へ進むと手動でしか開かない窓をガラッと開けた。

「今日は晴れていて気持ちがいいね。湿度が低く風が爽やかだ」

教授の柔らかな茶色の頭髮が風に揺れる。好奇心をくすぐられた近くの学生がその足元を盗み見ようとした。次の瞬間、教授はバンと窓を閉め、直立したかと思うと、両手で頭のてっぺん、つまり立ち昇る毛先から、つま先までを撫でおろし静止した。そして直立不動のまま早口でがなり立てた。

「だぐじどをうんじないだいうんじゅうせいめいたよあいそしかけたぬころでのういはえられ

ない。どういたらにめつとしたうなぎやさーとなぜがよおったときのおこちよさをこんちての
られうのか。なのえそっくりそのなでなくとものしたらにたようななんかくにらつてもらえ
るのか。やばいじたいけんできるとしてむをつくること。のひっけんにわたしはこのうねちかく
ぬいうしている。あいむなにはなつてきたじゃがじつにむぬかし」

学生たちは目を丸くしたり、口をぽかんとさせたり、ざわついたりした。なかには講義を録
音している学生もいて、書き起こし機能を使ってみると、

「だが、湿度を感じない第十四星命体を相手にそう話しかけたところで、同意は得られない。
どうしたらジメとした不快さ、サーッと風が通ったときの心地よさを感じてもらえるのか。
例えそっくりそのままでなくとも、どうしたら似たような感覚になつてもらえるのか。いわば
疑似体験できるシステムをつくること、その実現に私はこの二十年近くを費やしている。だい
ぶかたちにはなつてきたがこれが実に難しい」

と言っていることがわかった。

教授は再び窓を開け、両手を広げ風を浴びるような仕草をすると、窓はそのまま、靴のタッ
セルを上下させ教壇へ戻った。もはや学生の興味は靴下ではなく、教授そのもののへと移ってい
た。次の早口を聞き逃すわけにはいかないと学生たちは真剣に耳を澄ませた。

ところが一転、教授はいつもの穏やかな口調でゆっくりと壇上を歩きながら語り始めた。

「私が研究者になったのは、初代 There Tool の誕生前夜だった。昼夜問わず異種星命体の文字や音を解読するのはもちろん大変だったが、常に発見があり、自分の外に向かって何かを伝えようとするあらゆる生きものの表現の豊かさに驚かされる毎日だった。若かったのもあるが、わからないことに近づいてゆくことは一種の喜びだった。確かに、生活のすべてが研究にもつていかれた。時には苛ついたよ。しかし、今取り組んでいることと比べたら楽なものだった。感覚の共有は実に厄介だ。しかし実現しなくては、私たちの存在はこの宇宙で、そう遠くないうちに木端微塵になってしまう。第十四星命体が爽やかな風を浴び、それがいかに心地よいかを体感して、人間にとって数少ない移住候補地である F 系銀河の開拓を後押ししてくれなくては、私たちはいつまでたっても安定した生存環境を確保できないだろう。

外貌、体内器官、運動機能、言語、価値観に思考回路、人間と他の星命体では違うことばかりだ。約六十年前、人間が本格的に宇宙へ飛び出すと、異種星命体との接触が劇的に増えた。会話が成立する星命体、言葉を交わせなくとも身振り手振りで意思疎通可能な星命体、人間に興味を示さない星命体、関わってはいけない星命体、透明であるがゆえに私たちはその存在に気づかず、すれ違っただけの星命体もいただろう。宇宙では人間が想像していた以上にありとあらゆる生きものが行き交っていた。異種星命体同士が出会いはじめた当初、異なる種と積極的に交流したいと考える星はほとんどなかった。相手は正体不明で謎だらけ。そもそも、宇宙

に進出する生きものには必ず何らかの異常事態が起きていた。自分たちの星では解決できない問題があるから、得体のしれない宇宙空間に活路を見出そうとしている。あやしい生きものに接触してこれ以上の問題は抱えたくない。どの星命体も最初はそう考えた。が、すぐにこう思った。それでは本末転倒だ。自分たちだけでは解決できないと宇宙空間までやって来たのだから、異種星命体と交流すべきだ、と。

次第に、交流を求める星命体が自然と集うようになった。私たちは交流したいと手を挙げたうちの二番手だから、第二星命体——人間——。さっきの湿度を感じないかれらは第十四星命体、そして今日の講義で取り上げるのは七番目に手を挙げた、第七星命体だ。

交流を希望する星命体は、おしなべて共通するなにかをもっていた。例えば、数の概念、思考すること、移動すること、法をもつこと。どんなに姿かたちが異なっても、そうした共通項をもつ星命体のうち、一定の基準を満たした星命体で構成された組織がうまれた。それが十六クラブだ。異種との交流を欲した星命体の数は二百四十一だった。かれらは、己を己たらしめている要素を可能な限り列挙し、それが他の星命体と共通しているか、似ているかどうかを徹底的に調査した。

結果、調査に参加したうち、十六の星命体が互いに十六パーセントの共通項をもつことが判明した。我々人間もその十六の星命体のうちのひとつだ。

異種星命体間で十六パーセントもの繋がりと驚きだった。が、八十四パーセント違っている相手とうまく交流できるかといえば、案の定、不都合が山ほどあった。だから十六クラブは『異種星命体間の翻訳システム』を開発した。これが、普段みんなが『ツール』と呼んでいるThere Toolだ。このシステムにより、人間の言葉が相手の表現で伝わるようになり、相手の表現が人間の言葉で届くようになった。ちなみにツールのもうひとつの大きな役割である歩み寄り機能については次回の講義で取り上げよう。

例えば、さっきの湿度を感じない第十四星命体は、とんでもなく長時間の騒音を発する。これは人間における発話行為に等しい。ツールを使えば、頭がガンガンするそれを、文字あるいは発声として認識できるようにする。それにしても、かれらの思考、主張の長大さには舌を巻くよ。人間の脳味噌では溢れてしまつて処理しきれない。ちなみに、私は舌が短くて巻き舌が下手なんだが、かれらの舌は長い。かれらには人間の脳にあたる器官がなく、長い舌に膨大な情報記録される。興味のある人は捻転型言語、そこから転じて回文型語族などの文献を読んでみると面白いだろう」

教授は教壇の中央で話し終えると両手をポケットに突っ込んで立ち止まった。学生はメモを取るか、あるいはいいいよ小テストになると意気込んだ。が、教授は何も言わない。そして頭を下へ向けると舌を出して、何度か浅い呼吸を繰り返している。最前列の学生のなかには、嘔

吐するのかと机の上の物をさりげなくしまった者もいれば、喘息の発作ではないかと椅子から立ち上がって駆け寄った者もいた。が、教授はさっき以上の早口で、

「だるうーじどをうんじないだいうんじゅうせいめいたよあいそしかけとうーるぬころでのういはえろれろい。どういたるーにめつとしたうなぎやさーとなぜぐうーるおったときのおこちよさをこんちてのらるうのか。なのそつりそなでなんものしたるううにたよらーななんかくになもらえんか」

と喚わめいた。

「うん、今回の方がマシだな。さっきは巻き舌を忘れた。だけど所詮、頭でさっき言ったことを思い出して、巻き舌にしなきゃならないと考えて喋っているのだから、舌で話せているわけではないんだよな……」

ぶつぶつ言って舌を出したり引っ込めたりしている教授の様子に、駆け寄った学生は苦笑して席に戻った。

「気を取り直して、本題に戻ろう」

教室全体はまだ呆気にとられているが、教授は意に介さない。

「今でこそ感覚の共有機能までも付加されようとしているツールだが、初めはシンプルな翻訳ツールに過ぎなかった。当初、異星命体の「不思議なことば」に関する研究は、今では死語と

なっているブラックホールに放り込まれたも同然、右も左も、上下も、なにもかもがわからない完全な手探りで始まった。——あ、逆にブラックホールの意味がわからない？ いや、それでいいんだ。それがブラックホールなんだから——それでもかたちになったのは、作業を細分化したからだ。このなかには将来研究者の道を考えている人もいるだろう。There Toolのプロジェクトはチームで動く。それは初代のときも、現在開発中の第五世代でも変わっていない。文字、音声、単語の意味に図像、身体表現、禁忌とされている事柄など、複数のチームメンバーがそれぞれの専門分野を担当して研究を進めている。もちろん、工学、医学など他分野との連携や、中央政府や企業との定期的なミーティングも欠かせない。だからこの特別講義では専攻を問わず受講者を募った。

うん。初めての顔が多いな。が、見知った顔のなかには……いたいた！ 小テストがあるはずなのに、また話が長くなっているとうんざりした表情がいくつもある。でも、もう少し聞いて欲しい。各自の専門知識は前提として、異星命体を知るためには、まずは人間とかれらの違いに敏感でなくてはいけない。そして違いを知ることが、どんな共通点があるかを理解することには他ならない。

十六クラブの構成員の条件、つまり十六の星命体に共通していることのひとつに、『法をもつこと』がある。『宇宙に於ける対異種生命体接触法』は皆も学習済みだと思う。これは人間が宇

宙を航海するうえで基本となる考え方だ。『異種生命体』となつてゐる点が、この法の成立時期を物語っているね。いいかげん修正したらどうなんだ。そう思わないかい？ まあ、それはさておき、法をつくり、それを守るものと破るものとを区別し、ルールから逸脱するものにはペナルティを科すという社会構造をもつ星とでなければ、私たち人間は接触することができない。無法地帯に生きる星命体と交流したところでトラブルしか生じないだろう。知つての通り、十六クラブに属さない星命体とも、ある程度の接触は可能だ。例えば、私も君たちも大好きな靴下の星の皆さん、かれらは十六クラブのメンバーではないが交流できる。なぜなら、かれらは『法をもつ』から。人間は法をもたない星とは、たとえそれがどんなに友好的と思われる星であっても、交流できない。

さて、十六の星、それぞれにルールがあるのだから、当然十六クラブとしてのルールも存在する。そしてルールを破れば、当然裁かれる。人間にとっての裁判は、クラブでは『裁定』と呼ばれ、裁定プログラムもつくられた。トラブルが発生すると、当事者の意思にかかわらず自動で当事者の星へ通報され、自動航海で『裁定場』まで連れて行かれ、最終的に裁かれる。トラブルは自動検知され、どこで何が起きても、関連する星には状況がリアルタイムで配信される。もちろん、すべては記録され、複数名の星命体が関係している場合は、互いの表現に翻訳される。冤罪がうまれぬよう、すべてが関係各星に公開される。

それではお待ちかねのテストだ。これから君たちには、ある事件の資料を読み、映像を視聴してもらう。今から二十一年前、人間の宇宙船で起きた事件だ。君たちが生まれた前後とはいえ、有名だから知っている人は少なくないだろう。

資料は事件を起こした加害者による供述調書。これは裁定プログラムにより実施された供述を、私たち人間の言語に翻訳したものだ。そして映像は、ある時点から事件発生直前までの船内の監視カメラの記録。事件発生時の映像は含まないので、暴力的な映像を見ることはない。安心して欲しい。設問はあとで伝える。まずは資料にあたってもらおう」

教授が話を終え椅子に腰かけると、同時にスクリーンにテキストが表示された。

資料 1 供述調書

資料 2 船内の監視カメラ映像

- ・ 上記リンクをクリックして各資料にアクセスすること。
- ・ 必ず資料 1 を読んでから、資料 2 を視聴すること。
映像の視聴後、再度資料の確認や、映像を繰り返し視聴することは自由。
- ・ 11:00 になったら設問を伝える。
- ・ 資料 1 は、事件を検知した裁定プログラムの起動後、事件発生地点から裁定場へ移動する間に記録された、加害者の供述を書き起こしたものの一部である。船内に設置されていた監視カメラの記録により事件の詳細は確認できたが、被害者は全員が消失した（殺害された）ため、被害者の供述は存在しない。
- ・ 供述の翻訳には次のルールが適用されている。

1. 〈不詳〉

明確に認識することができないものは〈不詳〉と記されている。表現行為なのか、雑音なのか生理現象の音なのかなどを判断できない場合にも用いられる。

ただし、前後の文脈から予想がつく場合は " " として人間の言葉に置き換えられる。（例 " 成果 "）

2. ●や■

音声そのものは認識できるが、人間の言葉に相当するものがない、あるいは何を指しているのか分からない場合 ●や■等の記号に置き換えられる。

*

資料 1

事件名 第七星命体による人間襲撃事件
発生年 二一四〇年（人間にとっての年）
加害者 第七星命体 一体、コード
被害者 第二星命体 五名
乗船者名簿（出航前に運航管理庁へ提出された出航申告書に基づく。括弧内は当時の年齢）

運行責任者 A	(29)	X 研究所・▲分野研究員
副責任者 B	(25)	X 研究所・△分野研究員
乗船員 C	(32)	X 研究所附属病院・内科医
乗船員 D	(28)	X 研究所・○グループ主幹研究員
乗船員 E	(26)	X 研究所・▲分野研究員

本裁定プログラムが作動した理由は以下の通りである。

1. 本宇宙船の乗組員全員（第二星命体、五名）の生存を検知できないこと。
2. 本宇宙船に第二星命体以外の星命体がいることを検知したこと。且つThere Toolの作動を検知できなかったこと（本プログラム起動に伴い、There Toolも起動済みである）。
3. 複数の異常（衝撃音、悲鳴、振動等）を検知したこと。

本宇宙船の運航予定

本宇宙船は、十二日前に第三地球を出発し、第二地球ポートを経由、凍山銀河を周遊した後、ルツ星へ向かって航海中であつた。地球への帰還は三日後を予定していた。

本日、第十三日目に異常を検知し、現在、裁定場へ向かって自動運航中。裁定場への到着は二十六時間後を予定。

現在、拘束中である第七星命体一体は、船を破壊して侵入したのではなく通常のゲートより乗船しており、事件発生後も船体に破損等はないことから、裁定場への運航に支障はないと判断しこのまま自動運航を続ける。

なお、本データは、第二星と第七星ならびに十六クラブ本部へ同時配信されている。船内監視カメラの記録も各関係機関へ送信済みである。

——これより自動供述システムにより、加害者の供述の記録を開始する——

勝手に口が開く。話すための口が開く。プログラムが私の正しい口を開ける。どうしてすべての口が開かないのかと、プログラムは文句を言わない。しかし、他の星のやつらは文句を言う。

他の星や第二星がエンジンを生んだ。だから私は宇宙バッグで移動ができる。移動して、他のやつらに出会った。やつらはやると終えるだけではないと言った。やると止める。やると変える。やる。しかし、迷う。やる。しかし、終えない。私はやると終えるを知っていたが、他は知らなかった。第七星ではやると終えるだ。〈不詳〉『成果』だ。口と同じだ。話す口で話す。食べる口で食べる。やると終えるのための口だ。しかし、他の星のやつらは食べると話す口が同じ口だから、やるは終えるではない。やるはたぐさんのことをつくとやつらは言う。第二星は変態しないのに、やると終えるのたぐさんの種類を持っている。他の星のやつらに出会って、私のやるも変化するようになった。今も、やるが終えず、裁定場に向かっている。

私は掟はひとつでないと知った。掟には内側と外側がある。掟を破ったから、知った。私のコードも初めて知った。私はこの船でツールを使わなかったが、掟を破ったら私が使わなくて

もツールは起動すると知った。ツールやプログラムはたくさんを知っている。私を知っている。だから私の全部の口が開かないことに文句を言わない。第二星命体はエンジンを開発したから、ツールやプログラムより少なく、しかし私よりたくさんを知っている。もし、裁定場までの二十六時間と第七星までの四百三十二時間を選ぶなら、第二星命体はどちらを選ぶのだろう。

〈不詳。叫ぶような声〉

また新しい掟なのだろうか。

〈不詳〉

『核』が破裂する。二つに分裂する。

分裂しない。

大きくて白い*光が二つある。口が開くと光が黒くなる。もう一つの光も黒くなる。私の音と第二星の音がする。音が光にあたって、黒くなる。私の音と第二星の音で光は黒くなる。しかし、二つの黒は違う黒だ。

〈不詳〉

第二星命体はここにいない。私が話す。プログラムが私をのっとるのか。第二星命体が私をのっとるのか。私はシャットダウンできない。プログラムが私の意思を奪ったから、私はシャッ

トダウンできないと知っている。

黒と黒の間に*別の光が出た。

【*注 ここである『光』とは、脳内に表示される字幕機能のこと。自動供述プログラムが起動すると、脳内にスクリーンが表示される。第七星命体の供述が第七星命体と人間、それぞれの表現で二つのスクリーンに同時に映し出される。『別の光』は字幕を消すためのボタンを指す。】

黒も光も消えた。第二星の音も消えた。しかし、私は話す。話したい。私がしたことを話そう。話そう。私が話したいのは、船に私が話すようになる薬が積んであり、プログラムが起動してそれを散布したからだろうか。感染症予防の注射に何か入っているのだろうか。私は知らない。しかし、そんな掟があるのかもしれない。きっとそうだ。やると終えるのひとつではない。掟の外に掟がある。

私がしたことを話そう。私は第七星命体コード

だ。二千八百五十六時間前

に第七星を出発した。『成果』のためヘイズ鉤脈に二千二百八十時間滞在した。やるが終わり、百四十四時間前にヘイズ鉤脈を発った。第七星へ戻る途中だった今から二時間前に凍山銀河の近くを飛行する宇宙バッグの中にいた。暇だったから、暇つぶしを考えた。四百三十二時間も暇があった。暇潰しは三つあった。

1 意識をシャットダウンする

シャットダウンは第二星命体にとっての「眠る」「死ぬ」に近いと聞いた。全部の感覚を一時的に完全に放棄する。すぐ星に着くかもしれない。そのまま消えるかもしれない。五〇パーセントの確率でどちらかだ。もし、裁定プログラムが起動する前に、この船のなかで私がシャットダウンしていたらどうなったのだろう。シャットダウンは0.0005時間で完了する。あの時、0.00134時間あった。しかし、あの時私はシャットダウンしなかったのか、できなかったかわからない。もし、シャットダウンしても、プログラムが強制して、意識が戻ったのかもしれない。もし、この船から脱出して、自分のバッグの中でシャットダウンできていたらどうなっていたのだろう。もし、裁定プログラムが星命体でなく、船に対して起動するならば、脱出した私には、裁定は関係なかったのだろうか。もし、もし、もしもしもしもしもしもし。以前はもしはなかった。私には仮定がなかった。五〇パーセントの確率も知らなかった。仮定がないのがおかしいと笑ったのは、第二星命体や他の星のやつらだった。やつらは「時間の概念があるなら、当然仮定を知っている」と言った。私はシャットダウンする。しかし、私は「眠る」「死ぬ」はしないから、知らなかった。奴らがそう言ったから知った。私は二つの違いは知らない。第二星命体にしては柔軟性がある奴が言った。「*あなたたちの星に法が、ルールが存在する以上、あなたたちも常に仮定して生活しているのです。そうでなくては、逸脱、つまり

法を犯すという発想は生まれない。ルールがあつて、それを破るということは、守ることが前提になっている。守らないかもしれないと考えること、それが仮定です。第七星命体のみなさんは、私たち地球人を恐れている。地球人は第七星命体を傷つけるかもしれない。そう思っておられる。違いますか。それが仮定です。法には仮定がつきものです。その法という共通認識があるからこそ、今ここに集まっている我々はコミュニケーションをとることができるのですよ」と言った。私は裁定場に向かっている。私は仮定をする星命体で法をもっているから、裁定場に向かっている。

【*注 括弧内の発言は、十六クラブ結成前の会議におけるある第二星命体の発言である。そのため正確に翻訳済みであり、括弧内は設問の対象外とする。】

2 ただ時間が過ぎるのを待つ

私はいつもバッグの中で動く。外を見る。時が過ぎるのを待つ。物の隙間でぎゅっと縮む。船内いっぱいに広がる。それで運動はじゅうぶんだ。

私と第二星命体の構造はちがう。しかし、時間の感じ方は似ている。星までの四百三十二時間を第二星命体は理解できるだろうか。私はやると終えるを繰り返す。四百三十二時間はやると終えるが遠い。ある星命体が「暇を知っているのに娯楽がないのはどういふことだ」と言っ

た。第七星には娯楽はない。

私はほかの星のやつらと会おうと『核』が揺れることが多くなった。

3 ほかの船に接近する

私は他の星の船が近くを通つたらと仮定した。他の船の中を見たかった。接触ではない。どの星の船でもよかった。

近づく船があった。第二星の宇宙船がルツ星の方へ向かっていた。しかし、大きな船だから、中は見えない。私は信号を送った。止まって欲しいと送った。私はツールを用意した。しかし、第二星の船はすぐに止まらないと思ったので、宇宙バグの速度を維持した。しかし、第二星の船が遅れ始めた。私の後ろで止まった。私も止まった。私は掟に従ってツールを起動しようとした。しかし、ツールを起動していないのに、第二星の船のボーディングブリッジがのびてきた。第二星のツールも起動していなかった。他の星と会うとき、二つのツールが動く。三つの星なら三つのツールが動く。クラブの掟だ。しかし、第二星の船は私のツールを確認しなかった。第二星のツールも起動しなかった。ブリッジはのびてきたが、第二星命体は私に信号は送らなかった。止まれとも、入れとも発信しない。しかし、ブリッジがあったから、私は渡った。船の中へ進んだ。第二星命体に接触せず、中を見て、宇宙バグに戻るかもしれないと仮定し

た。第二星命体はなにも発信しなかった。ツールも動かなかった。だから私は船に戻るだろうと仮定した。私は仮定がうまくなった。

私は第二星の船が掟を破っているのを知っていたから、裁定者たちは、侵入した私が悪いと言いかもしれない。しかし、私は第二星は友好的だから、掟は破らないと思った。私は第二星命体は理由があって起動しないのだろうと思った。私は第二星の貢献を知っている。この大きな船は私を第七星へ連れていくかもしれないと仮定した。旧式の宇宙バッグと第二星の船は航海速度が違うから、船は早く第七星に着く。

私と第二星命体はツールを起動しなかった。両方同じだからペナルティは小さい。私は進んだ。進み始めて0.5時間経過した。しかし、第二星命体は発信しなかった。このまま進めば、私の罪は大きくなる。ツールを使っていないのは同じだ。しかし、進むのは私だ。私が第二星の船に入るから、ツールなしでこのまま進めば、私の罪が大きくなる。

仮定した。もし、私だけツールを使ったらどうなるのだろうか。もし、私が引き返したらどうなるのだろうか。もし、もし、もしもしもしと『核』が揺れて、目と目がぶつかったから、仮定をやめた。

しかし、私はまた仮定した。第二星命体はよく喋る奴らだ。「勝手に侵入した」と文句を言うかもしれない。起動しろと言って、私はツールを起動して、奴らと交流するかもしれない。ブ

リッジの終わりまで進んだ。私は船内へ通じる扉を見た。しかし、第二星命体はなにも発信しない。ツールを使わないではかの星のやつらに接触するから、きっとやると終えるではないと思った。暇つぶしは大きくて新しいものになると思った。

ブリッジは自動で格納され、私はバッグに戻ることができなくなった。船内の責任者に接触しなければ、外に出してもらうことができない。しかし、責任者はいない。私は責任者がどこにいるか、どうやって接触するか知らない。第二星命体は形も音も出さないから、私は進むだけだ。責められるだろう。しかし進むしかできない。扉は自動で開いた。私は進んだ。その先にあるハッチも開かれた。

私は廊下を進んだ。音がした。第二星命体の音ではなかった。天井から音がした。絶え間なく静か。まわりつかず離れない。私は目を上に動かした。天井が揺れていた。天井になにかいるのだろうか。しかし、いない。しかし、天井は揺れていた。私は天井にはりついた。

0.2116時間経って私は気がついた。天井もまわりの壁も動いていた。水だ。動く水があった。動く、動く、動く動く動く水だ。しかし、●がない。どの目も●を見ない。ない、ない、ない、ない、ない。●がない水。●はないのだろうか。ないないないないない。

〈不詳。五分二十九秒続く〉

私は水が■思った。しかし、私は間違っているのだろう。きっと第七星と第二星の水は違う。

私は天井から壁に進んだ。透明な壁の向こうに塊があった。私は●だと思った。しかし、違った。塊はきつと「植物」だと思う。以前、第二星は植物がたくさんあったと聞いた。しかし、第二星命体が植物を消した。消したのに「植物」を船に置く第二星命体は、きつと執着する星命体だ。第二星命体は執着するのだから、私は第二星命体はツールを覚えていると思った。きつと第二星命体はツールを使うと思った。以前、第二星命体は「地球人」と名乗った。しかし、拠点をはかの星へ移し始めると「人間」と名乗った。「地球人ではなくなるが、今後どこに住もうと、われわれは『人間だ』」と叫んだ。

私は●を探して、壁を這って揺れた。突然▲が出てきた。0.00064時間経つと、▲は弾けた。再び▲が大きくなったが、弾けた。何度も起きた。▲が弾けると、「植物」の塊、透明な壁、第二星の水を見た。▲が膨れた。大きくなる▲の間を進んだ。今度は0.00015時間で▲が弾けた。

▲が弾ける前、私は激しく振動し、水の音が消えると気がついた。目は天井や壁でなく、床を見ていた。水の音がない。水が動かなくなったのだろうか。●を探して壁を這った。しかし、▲が出てくる。▲は大きくなったり、小さくなったりした。進み続けると▲は大きくなった。また▲は弾けた。しかし私は▲が弾けても壁を這い、天井まで戻った。

私は遠くにあれを感じた。私は探すものが●ではないと気がついた。私は天井と▲のなかを

進んだ。

私はダクトに着いた。ダクトは天井からホールにつながっていた。私はダクトを進んだ。▲が大きくなった。大きくなる▲のなかを進んだ。私はダクトで二回曲がった。▲が伸びたり、縮んだりした。私はダクトの出口が近いと感じたから、止まった。あれを感じた。▲が弾けた。音がした。第二星命体の音ではない。私の音ではない。ダクトに風が来た。私はダクトへばりついた。私は径に沿って曲がって、伸びた。風と出口まで戻らないようダクトの内側に体を巻きつけた。また▲が出た。しかし▲は弾けた。▲は繰り返し現れて、弾けた。風がいなくなったから、私は進むことにした。私はダクトの出口まで0.00495時間のところにいた。真下に第二星命体のあれがたくさんいた。第二星命体は変態せず、不自由だった。あれは何か言っているようだった。しかし、ツールがないから、何を言っているかわからなかった。私はやるだけで終えるがなかった。『成果』がなかった。成果がないは娯楽かもしれない。また▲が大きくなった。私の娯楽は消えた。▲は重くなった。同時にあれを感じた。三万四千四時間しか経っていないのに、私はあれを感じた。『核』が溺れそうになった。風が来た。勢いよく来た。私の真下には第二星命体があった。私はダクトから離れないように縮まった。しかし、小さくなり過ぎたから、強い風に逆らって力を入れた。しかし、私は失敗して、外に飛び出た。第二星命体のすべてのあれが私を見た。私の目のすべても第二星命体を見た。反射敵に第二星命体

二体の形を真似た。どうしてあれがここにいた？

『核』が溺れ、飛び出した◆が捻じれ、目と一緒にあれを探したがなかった。◆で一時間探した。しかし、あれはなかった。あれはどこにもなかった。『核』が戻ると第二星命体が消えていた。前回から30045.008時間しか経っていなかった。

私がしたことはここまでだ。あとはプログラムに従った。

*

教授はこれまで何度となく読み返してきた資料にざっと目を通し終えたと、学生をぐるりと見渡した。異星命体による供述ならば学生も熟読してくれるのではないか、という見当は外れた。教授は第七星命体になったつもりで、資料を読んでいる学生の正確な数を数えようとした。瞬きを我慢したつもりが、なぜか息まで止めてしまっていた。数えるまでもないことを認め、一度咳払いをして呼吸と姿勢を整えた。次に動画のURLをクリックした。同時に、第七星命体の目が反転しているとき、内側では何が起きているのかを想像した。想像しながら目を閉じてしまったせいでリンクは上手くクリックされず、目を開けても動画は始まっていなかった。教授はそのまま想像を続けた。人間の言葉にないから「▲」としたそれを、今なら「膜」

とても訳そうか。しかし人間が思い浮かべる「膜」とはほど遠いのだろう。ありきたりな膜を描いては、「違う」と呟いて目を開ける。また別の膜を描く。教授はしばらくそれを繰り返した。それから諦めたように頭を左右に振ると、URLをクリックした。目の前の小さなディスプレイで動画の再生が始まる。これまた何度となく見た映像だ。それでも教授は新鮮な気持ちで画面に向かった。

*

三分割された映像が映し出された。一つは大きく、その下左右に二つの小さな映像が並ぶ。大きな映像には「中央ホール」、小さな二つにはそれぞれ「右／左廊下」と表示されている。中央ホールには大きなテーブルが一つと隅に小さな机が置かれ、そこに三名の人間がいる。それぞれに割り当てられているアルファベットは乗船者名簿に符合しているようだ。この船の責任者だというAは黒髪でほっそりとした青年。テーブルに腰かけ、絶えず貧乏ゆすりをしている。頬杖をついて窓の外、どこを見ているのかわからないのが内科医だというCで、テーブルに突っ伏したかと思えば、頭の巻き毛をねじったり手持ちのデバイスを凝視したりと忙しいのがD。Dは数式なのか思索なのか、絶えず何かを呟いている。小さかったり、不明瞭だっ

たりする音声も、すべては画面に字幕で表示される。だからといって、専門的なDの吹きはほとんど誰にも理解できない。三人の間に会話は無いが、時折互いを見合う。

右の廊下から一人、やや遅れて左からもまた一人、ホールへ向かう姿が映し出された。右からやって来るBという丸顔の青年がホールに着くと右の画面が暗転した。BはC、Dと順に何かを渡して、最終的にAの隣に腰をおろした。BはAにも同じように何かを手渡した。セロハんに包まれた大量のキャンディのようだ。早速キャンディを舐めるAに向かってBは「なんだか緊張する」と言って肩を組んだ。といってもBが小柄なのかAが長身なのか、BはAの背中へ腕まわした格好だ。BはAの耳元で囁いた。

「やっぱり、はつきりさせなきゃだめかな」

「今更どうしたんだよ」

「いや、だって冷静に考えたらバカみたいな話だぜ。それにあいつが素直に協力してくれるかな。無理強いさせるのは嫌なんだ。今更だけど、正直言っただけで気が引ける」

「中央研だって乗り気だっていうのにBはそれでいいの？ 僕らずっと騙されてたのかもしれないんだよ。バカみたいな話が現実に取り得るってことは、僕らはいっだって意識しなきゃいけないことだよ。第一、Bがそんなじゃダメだって。お祖父ちゃん浮かばれないよ」

大きな声で訴えるAに、Bは、

「うん、まあ」と溜息まじりに返した。

Cが窓の外を眺めたままぼそっと呟いた。

「Aにしてはまともな意見だな。まあ、祖父さん云々じゃないとは思うけど」

すると独り言ちていたDが顔を上げ、

「本当にその通り。これ、重大事案だから。こんな仮説ありえないって主観とか、家族の名誉とか、そういうレベルの事案じゃないから。Bがいやなら俺から切り出すから」

と、語気を強めた。そこにEが現れ、左の画面も暗転し、三分割されていた映像はホールだけを映す大きな画に切り替わった。

乗船者名簿がなければ、Eが船の責任者だと思う人がいるかもしれない。途端に静まり返ったホールをEは脇目もふらずゆっくりと進む。屈強な体つきも相まって、他のメンバーより年上に見える。しかしすぐに、これはリーダーとは正反対のタイプの人間だとわかる。Eは隅の机を椅子ごと尻で力任せに壁に寄せ、机の上に深く腰かけた。それでも両足をべったり床に着け、気怠そうに両脚を伸ばしている。目立つのは粗暴さ、捲り上げられた作業着からのぞく紫にも見えるほど黒く日に焼けた筋肉質な腕、長い脚、そしてスキンヘッド。Eは言った。

「話ってなに？ さっさと始めようぜ。早く部屋に戻りたいから」

すぐにAが反応した。

「どうしてのっけからそういう態度なの。いつも言ってるよね？　もう少し足並みを揃えようって」

勢いよく立ち上がったAは華奢ではあるが背の高さではEに勝るとも劣らないらしい。

「ずいぶん気合入ってるな。今回初の運行責任者だから？」とEが笑うと、Aは目を瞬かせて両手をぎゅっと握りしめた。後ろから見ていたBはテーブルから立ち上がるとAの背を宥めるようにポンポンと叩き、それからキャンディ数個をEに差し出した。EはBを睨んだ。が、他の四人の視線はEではなくBの掌にあるキャンディに注がれている。

「これ、美味しいよ。みんなのお墨付き」

Bの言葉にCが白衣のポケットからキャンディをひとつ摘まみ上げ、揺らしてみせた。Eが顔を背けると、Bは持っていた一つを選び、包み紙を開けると中身を口のなかに放り投げた。

「コーヒー味だ」

Eは再びBを睨んだ。が、何か思い出したように真顔になってこう尋ねた。

「そういえばさっき外部からの交信があっただろう。あれ、誰が対応した？」

「僕が対応した」

即座にAが返した。そして「運行責任者ですから」と胸を張ったがEは無視した。Aは大袈裟に脱力してからこう報告した。

「第七星命体が一体。交流希望の信号で緊急性はない。とりあえず待機してもらおうよう合図を送ってある。特別な配慮は必要ないだろう。後回しで問題ない」

Eは鼻で笑った。

「よっぽど重要な話があるんだろうな。相手がどんな交流を求めてるかもわからんのに、それを後回しにするんだから」

今度はAが笑った。

「そりゃそうだよ。重大事案だもん。そんな偉そうな顔していらなくなるからな」

「偉そうってなんだよ」

「自覚ないの？ Eはいつもそうだよ。『Eエンジン』のEって言ったって所詮孫だろ。お祖父ちゃんが開発したからって、Eまでそんなに偉いの？ Bのお祖父ちゃんだって開発者の一員だったんだ。だったらどうして『E・Bエンジン』じゃないわけ？ 『B・Eエンジン』、いや『Bエンジン』でさえあったのかも」

今にも取っ組み合いをはじめそうな二人の間に大きな声が割って入った。

「そんな話をしたいわけじゃないでしょ。しっかりしてよ、リーダーなんだから」と睨みをきかせたのはDだった。

「ごめん」

Aは誰ともなしに謝った。隣にいたBが「せめてこれでリラックス」と、AとEそれぞれにキャンディを差し出した。するとEはそれを払いのけ、Bの作業着の襟元をぐいと自分の方に引き寄せた。Bは小柄ながらも力が強いのか、すぐさまEの手を除けた。Eは小さな声で「やっぱりそうだ」と呟いた。

「リラックスが必要なのはお前だろ。あいつは便乗して喚いてるだけ。言いたいことがあるのはお前なんだ。なんだよ、緊張して言えねえのかよ。俺は暇じゃないんだ。文句があるならさっさと言え」

EとBはしばらく見合った。

微動だにしない二人と時折走るノイズのせいで、フリーズしてしまったかのようにだ。が、落ち着きがないAとD、それから画面の左下で経過してゆく時間から、再生中だとわかる。

ようやく口を開いたBはEを見ずにこう訊いた。

「エンジンに関する噂、聞いたことない？」

「いや。なにも」

Eも空を見たまま、瞬きもせず答えた。

会話はそれきりで、また長い沈黙の気配が漂った。が、二人と離れたところでAがDを引き寄せ耳元で囁いた。

「そろそろ用意する？」

Dは巻き毛を指に巻き付け、しばし唸り、ためらいがちに頷くとホールを右手から出て行った。すると、それまで窓の外が見える定位置から動かずにいたCが、Dの後を追うように小走り、しかしホールと廊下との境目で立ち止まった。そこからBとEをうかがい、その合間に何度も後ろを振り返る。Cがぎょっとした顔をして前を向くと、間もなくDがホールに戻って来た。「さて、どうなるのやら」と呟くDの手は手袋に包まれ、その中に小さなガラス壘が握られている。が、壘の中には何も入っていないようだ。

Dは壘をテーブルの中央に音を立てずにそっと置いた。Eは壘を見た。残る四人はそんなEを見ている。

目を細くして壘を凝視しているEに向かってBは言った。

「ここ最近、『Eエンジン』の本当の開発者は誰なのかってことが話題になってるんだけど、知ってる？」

Eは反応しなかった。が、視線を徐々に壘からBに移すと顔を傾けながらこう返した。

「は？ 何だよそれ。なんで今更そんなこと話題になるんだよ。俺の祖父さんがつくったから『Eエンジン』って名前になってるんだろ」

Bが答えずにいるとEは笑いはじめた。

「そんな訳わかんないことで呼び出されてるの？ 俺に言われたって、どうしようもないことだろ。文句あるなら誰か上の奴に言えよ。死んだ祖父さんだってどうにもできない。第一、名前が『E エンジン』だからって、他の人間が関わっていない訳がないだろう。現にお前の祖父さんだってプロジェクトの参加者だったんだ。名前に『E』が付けられて、俺はそいつの孫だってだけ。お前らは『B エンジン』に改名したいの？ それとも、A だの B だの E F G だって全員の名前が入ってりゃ気が済むわけ？ 好きにしろよ、そんなの。くだらだねえ。これのどこが重大事案だよ」

B は E の歪んだ笑顔を凝視し、しかし何も返さない。

離れたところから A が「E はさあ——」と声を上げた。壇のそばに立つ D はそれに苦い顔をしたが A は気づいていない。

「E はさあ、お祖父ちゃんから、エンジンをどうやって開発したとか、実験成功したときこうだったとか、そういう話って聞いたことないの？」

E は A へ顔を向けると、ゆっくりと答えた。

「ないね。祖父さんが開発したってことは、まわりから聞かされたけど、本人から聞いたことはない。だって、俺が一歳の頃に死んでるもん。みんながお前みたいじゃないの。親父だって俺が生まれる少し前に死んでる。俺の家族は祖母さんだけ。お前みたいに『お祖父ちゃん』な

んていないの」

DはAを横目で睨むと「だから何も言うなって！」と小声で注意した。

「そもそも開発の話は家族にだってタブーだろ。身内だから、まだ子供だからって、軽々しく話していい内容じゃない。どこから機密情報が洩れるかわかったもんじゃない。そんなこと、ここにいる全員わかってるだろ。それともなに？ Bはそんな話、聞いたことがあるの？

あ、そうか。エンジンの本当の開発者とやらも祖父さんから聞いたのか」

「まさか。俺も祖父さんとはとんと会ったことがない。会ったところで『タブー』しか話せてないよ」

そう返したBをEは睨みつけながらも、いくらか落ち着いた様子を見せた。が、

「だったらそんなくだららない話、誰がはじめたんだよ」と凄んだ。

Bは一呼吸置いてからこう言った。

「日記だよ。祖父さんからも親父からもエンジンの話を聞いたことはなかった。お前が言う通りエンジンだけじゃなく仕事の話なんてほんと聞いたことがない。親父に質問したことはあったよ。でも、何も教えてくれなかった。だけど半年前、日記が送られてきたんだ」

「日記？ 祖父さんの日記か」

「違う。祖父さんたちと同じチームメンバーだった人の日記なんだ」

Bは続けた。

「一昨年だったかな、その人が亡くなった。娘さんが遺品整理をしていたら日記が出てきた。日記といっても書かれているのは仕事の専門的な話ばかり。娘さんはざっと目を通しただけ。読んでも面白くないし、意味もさっぱりわからない。だから処分しようと思った。でも、貴重な資料なのかもしれないと思った。それで、処分しかねてなんとか日記のページを行ったり来たりしていた。そんなある日、『この日記の送り先』と書かれたページを見つけた。そこに書かれていたのが俺の祖父さんの名前と所属先だった。だけど祖父さんはとっくの前に死んでる。父さんも同じ。で、ある日突然、俺にその日記が届いた。日記にはエンジン開発に関する疑念が書かれていた。本当にEの祖父さんが開発したのか、どういう経過で開発に至ったのか、再検証すべきだって書かれていた」

「だからどうした」

そう言ってEは笑った。

「何十年も昔の、それも突然送られてきた日記を真に受けるなんて、お前科学者として一体どういうセンスしてるんだよ。さっきも言った通り、うちの祖父さん一人で研究してたわけじゃないだろ。たくさんの人が関わって、研究所全体でプロジェクトを進めて、開発に成功した。」

そのなかで一番の功労者が俺の祖父さんだから『Eエンジン』って名前になったんだと俺は思ってる。だけど文句があるなら変えればいい。俺は祖父さんになんの情もない。日記を書いた奴が嫉妬してたのかもしれない。俺の祖父さんが嫌われてたってこともありうる。性格悪かったんだろうよ、きつと俺みたいに。名前なんて勝手に変えろよ。俺は関係ない」

話を打ち切って出て行くこうとするEを「最後まで聞けよ」とBは大きな声で引きとめた。

「俺だって、関係ないと思った。他人の日記なんて興味なかったよ。勝手に処分してくれて構わなかったのになって思った。うちだってEとそれほど変わらないんだ。親父と祖父さんが仲良くなかったんだよ。だから祖父さんのことをよく知らないんだ。でも……面白かったんだ。読み始めたら、当時の計測ソフトの頼りなさとか推進系の問題点とか、色々面白くて、上司に対する愚痴もあって、そういう部分は今も昔も変わらないんだと思ってどんどん読み進めていった。そうしたら問題のページにたどり着いた。エンジン開発者として名を馳せるEの祖父さんに対する疑問が書かれてた。同じ意見をもつ研究者やエンジニアが複数人いたとも書かれていた。日記を書いた人は真偽を確かめようとしたものの実行までには至らず、疑いはそのまま。Eの祖父さん本人に聞いたですようなことはしなかったらしい」

Eはいつの間にか机に座り直し、腕を組んで耳を傾けている。

「娘さんたちはこの『疑惑』については何も知らない。そもそもこのページを読んでいないと

思う。俺に日記を送ってきたのはただ単に『送り先』ってメモに従ったからで、この疑念を解決してくれと依頼してきたわけでもない。俺だって、読んだときはそんなことがあったんだと思っただけで、調べようなんて気持ちにはならなかった。

だけど面白かったんだ。Eの祖父さんに対する疑いの着眼点が。冗談かな？ ネタなのかなと思った。ふざけた話だと思ったから、Aたちに話したんだ。だって冗談だと思ったから。今も頭のどこかでそう思ってる。もし本当だとしても、信じられないんだよ……。俺たちにはEの祖父さんを看板から引きずりおろそうなんて気持ちは微塵もない。これほんと？ 面白い。調べてみるかって軽い気持ちだった。でも、いざ調べたら、面白いだけでは済まない話だと思った。エンジン名なんてどうでもいいんだよ。もしこれが真実なら、とんでもないことになる。お願いだ。協力してもらえないか。Eにとっても大事なことだ。お前がいなきゃ何もはじまらない」

Eは頭が痛いともいうように片手で額を抑えながら頭を振った。すぐさまAが「それは協力しな——」と言いかけたがDが慌てて口を塞いだ。Bは話を続けた。

「今でも中央研究所の資料館に祖父さんたちが当時使っていた工具とか作業着、実験装置とか、色んなものが資料として保管されてるだろ。三ヶ月前、それを使って日記に書かれていることに信憑性があるのかどうか、研究所から許可をもらって簡単な調査をしたんだ。AとDに

も立ち会ってもらった」

「へー、そうなんだ。随分と早いご対応で。俺は何も聞いてないけど。まあ、遣伝子以外祖父さんとなんの絡みもなかった俺の許可なんて必要ないからな。でもそれなら、今更俺が協力なんてしないでいいんじゃないの」

「先にEに伝えるべきだったよ。ごめん」

Eは鼻で笑ってから、「で、何がわかったの？」と尋ねた。

するとBは中央のテーブルのそばにいるDの方を振り向き、何も言わず頷いた。Dも同じように頷くと、手袋をはめた手で小壇の蓋に手をかけた。そしてのけぞるようにして蓋を回し、それを素早く、しかしそつと壇の隣に置くと、顔半分を腕で覆ってホールと廊下の境目で立っているCのそばへ急いで駆け寄った。が、Cはこっちへ来るなど言わんばかりに後退った。二人の様子にEは怪訝な顔を向けた。が、突如異変が起こった。Eが白目を剥いている。AとBはそんなEを黙って見つめている。

「蓋していい？」

Dがそう訊ねたが、Cが激しく頷いただけで他には誰も反応しなかった。Dは巻き毛を揺らしながらテーブルまで戻ると、慌てて小瓶の蓋をしめた。同時に、Cが近くの壁に設置されている何かのスイッチを押した。

四人の視線の先にはEがいる。Eは机に座って脚も腕も組んだまま、一切を動かさない。が、白い目だけが小刻みに揺れる。

AがCに向かって「強にして」と大声で伝えた。Cは再びスイッチを押す。どこかでゴーツという音がした。すると何事もなかったかのようにEの瞳が戻った。Eは異変が起こる前と同じ、怪訝な顔をしている。

ほかの四人は互いに目を合わせた。Dが再び壇の蓋に手をかけると、Cも再び腕で顔を覆った。Eは一体なんだと苛立ったように立ち上がった。が、Dが小壇の蓋を開けると、Eはまたもや白目を剥いた。唇が震えることもない。直立不動でただ白目だけが揺れる。四人が互いを見合う。慌ててCがスイッチを入れる。どこかでゴーツという音がする。Eに瞳が戻る。

彼らはそれを何度か繰り返した。四回目で、Cはスイッチを押す代わりに、Eの眼球運動や脈拍、筋肉の状態などを数回に分け、丁寧に、しかし手早く観察した。

「詳細は後で話すけど、とりあえず異常はないね。今も普通に呼吸している。でもおそらく、この状態のときは何も見えていないし音も聞こえていない。記憶もないんじゃないだろうか」「もう十分だよ。ここまでにしよう」

Cの代わりにBがスイッチを入れ、Dは「じゃあこれ、片付けていいね」と壇の蓋がきつくしまっていることを何度も確認した。

やや遅れて、Eの瞳が戻った。瞬きを繰り返しているEに気がついたDが尋ねた。

「E、どうかした？」

「なにが？」

「なにか、感じない？」

「なにも感じないね。お前たちへの不信感と嫌悪感以外は」

四人がEを見つめる。しばらくするとEはにやっとして上の方を指さした。

「……ああ、この音か。お前ら、この音で騒いでるのか。たまにあるだろ。別にエラーでも故障でもないだろうに」

Eは彼らを見つめ返し「くらだねえ」と呟くと、左側の廊下へ向かって歩き始めた。

「待てよ。まだ話は終わっていない」

AがEの腕を掴んだ。

「もういいだろ。意味のない話に疲れた。ただでさえどうでもいいエンジンの話だったのに、もっとどうでもいいただの音なんか騒いでんの。なにが協力してくれだよ。勝手に検証でも改名でもしてくれ」

すかさずDはAをEから引き離すと、

「とにかくちょっと待って。これ片付けて来るから」

と言って、壇を両手でしっかりと守るようにして右側の廊下の奥へ走り去った。

「そうそれ、その壇。なんだよ、それ。思わせぶりにしやがって。一体何したいんだか」

ホールを出て行こうとするEの前に立ちはだかったのはBだった。

「Dが戻ってからさっきの話を続けよう。本当に大切なことなんだ。お願いだ」

そう言って頭を下げたBを見て、Eは立ち止まった。Bが頭を上げず、動くつもりもないとわかると、壁に寄りかかって腕を組んで溜息をついた。

しばらく誰も口を開かなかった。

「Dのやつ、戻ってくるの随分遅くないか」

スイッチを切り替えながらCが言った。ゴーツという音が少し弱くなった。

「あいつ、壇を割ったりしてないよね」

「まさか。お前じゃあるまいし」

Cに笑われたAが廊下の方を振り返った。途端、遠くから悲鳴が聞こえ、次の瞬間、Dが叫びながらホールに飛び込んできた。

「どうしよう。どうしよう。どうしよう！ さっき交信してきた宇宙バッグ、あれ一時待機になんかなってない。相手はもう船の中にいるみたいだ。この中にいるんだよ！ 間違って入船許可のボタンが押されてたんだよ！ どうしよう。どうしよう。どうすんの、A！ ツールも

起動させていないっていうのに。どうするんだよ！　これとんでもない規則違反になるぞ。どうするんだよ」

DはAの肩を掴んで揺さぶったがAは口を半開きにしたまま動かない。Dは取り乱したように、「それにまだ臭いんだよ」と言ってCをどかすと、壁のスイッチを操作した。再びゴーツという音が鳴り響いて、背の高いAの頭頂部の髪の毛がかすかに揺れた。

「お前なにやってんだよ」

EがAの胸倉を掴んで怒鳴った。Bは慌てて船内の監視カメラを確認し、Cも物凄い速さでキーを打ち込み始めた。

その時だ。吠えるEと怯むAの間に、頭上の排気孔から、とろりとした深い紫色のなにかが垂れてきた。ゆっくりと、まるで意思をもっているかのように落ちてくる。二人はほぼ同時に顔を上げた。それは一瞬のうちに紫や緑に色を変え、輝いている。それには複数の目があり、四つの口があり、中央では紅色のようにも虹色のようにも見えるところとした、それでいて弾力があるようなゼリー状の塊が蠢いている。似て非なる様子だが人の型に変形しながらゆっくりと落ちてくる。衣服は身につけておらず、毛もない、裸の人型。マネキンになって落ちてくる。しかしマネキンと違って、背中からトウモロコシの髭のような、長い尾にも、鞭にも見えるなにかが飛び出している。

Eは瞬きもせず、白目も剥かず、相手に見入っている。一方Aは、ポケットからキャンディを取り出すと、ゆっくりと包み紙を開き、中身を口に放り込んだ。舐めながら、残りのキャンディを奇妙なマネキンへぐっと差し出した。人間には操れないほどゆっくりと時間をかけて降りてくる相手へ向かって、何度も執拗に手を差し出しこう言った。

「これ、美味しいですよ。あと、まずはツール起動させません？」

しかしマネキンは受け取らない。力んでいたAの指先は次第に震え、キャンディを舐めていたはずが顎を歪ませて噛み砕き、それでも足りないのか手の中にあつたキャンディすべてをセロハンごと口へ放り込んだ。そして、ひとつだけ床に落ちたキャンディに気がつくと、慌ててマネキンへ差し出した。完全に着地したマネキンに「第七星命体」と字幕が重なる。第七星命体は一瞬お辞儀するような姿勢をとった。が、それは背中から伸びる長いものをしならせるためだったのかもしれない。その長い何かによって、Aの手からキャンディが払いのけられると、「ひい」という悲鳴が一瞬間こえ、そこで画面は暗転し映像は停止した。

II

十一時になった。学生たちが見ている画面が自動で切り替わり、教授は大きな声でこう告げた。

「さて、今、画面に表示されているのが設問だ。制限時間は三十分。解き終えたら各自答案を私宛に送信してくれ。あらかじめ断っておくが、資料に登場したE・B論争そのものに気をとられてはいけない。今日のところは、テストというよりチェックに近い。答えが合っているかどうかも大切だが、それよりも君たちにはどれくらい異種星命体と人間の違いに敏感なのか、あるいは鈍いのかを自覚してもらいたい。え、今日初めてこの事件を知った？ ええ、論争自体よく知らない？ あれ、君も？ 思っていたより知らない人が多いようだ。確かにこの事件が起きたのは今から二十一年前だから、皆が生まれた前後の出来事だ。事件後一、二年は世間を騒がせたが、EとB、両家の血筋ともこの事件で途絶えてしまったことが大きいだろう。感情論に陥ることもなく、科学的な検証を経て、論争は静かに決着した。だからといって、あんな大事件を知らないとは……ともかく、論争は気にかけないこと。それでは開始」

設問 1 資料 1 の翻訳について

この供述は、当時の最新技術が搭載された There Tool（第二世代）により翻訳された。しかし本講義にあたって、私はある段落中のいくつかの文を改訳した。そのため、その段落は他の文章と様子が異なっている。その段落を抜き出し、他の部分とどのように違うのか、記述せよ。

改訳された段落（段落のはじめと終わりを 5 字ずつ記載のこと）

訳の違い

設問 2 第七星命体について

第七星命体は人間がもつ五感の一部が人間とは異なっている。それがなんであるのか、またどのように人間と異なるのか自由に記述せよ。

五感

違いなど、気がついたことを自由に

一斉に課題に取り組む学生たちを横目に、教授は窓際の階段をゆっくり昇った。そして窓の外
の緑——それは半分が自生する植物で、もう半分はバーチャルでやけに繁茂させられた草木
——を眺めて思った。

（これまでいくつもの壁を跨いで、壊して、穴を開けて、どうにか人間と異種星命体は近づい
てきた。技術を進歩させ交流を続けるのは、互いを認め合い、安全性を担保するため。けれ
ど、その行き着く先は異なるものが同化する未来でしかない、そう感じる時がある。

誰も彼も、頭の中は開発中の第五世代のツールのことばかり。当然だ。感覚の共有機能は絶
対に必要な。しかし目標に近づくにつれ、「わかるものか」と憤然とした気持が膨れてくる。
前から潜んでいたのは知っている。皆、心のどこかに同じような矛盾を抱えていることもわ
かっている。だが、頻繁に「わかるものか」「いや、私はわかりたくないのだ」と思うようにな
った。人間がわかつている気になるような翻訳をやめ、共有できないこと、理解できないこ
とをそのまま言葉にしたい。大切なのはそれだ。未知の感覚を知りたい一方で、既に手にした
異星の文字や音、半分も理解できていないそれらを無性に放棄したくなるときがある。一種の
病だろうか。

相互理解や異文化交流、それはかつて地球人だった頃、私たちの祖先が地球上で試みたこと
だ。しかし争いは絶えず、自分たちの唯一の星を傷つけ、それでも「人間」として、たとえ地

球を離れても私たちはともに生きていくのだと宇宙へ飛び出した。地球での失敗は二度と繰り返さない。しかし、異なるもの同士があまりに近づけば、個の抹消が起こりうる。が、近づかないと相手のことを理解できない。知ろうとして近づき、相手に執心する。翻訳機能なんて、その最たるものではないか。異なる種の表現行為なんて、ほとんどのケースで人間とはまったく異なる。本来、比較さえ不可能な代物だ。しかし、ツールは私たちが「わかったつもり」になれるように、人間のスタイルに近づけて、余計な沈黙やテンションを加えて訳す。当然、相手もツールで同じことをしている。互いに、ありのままでは碌なやりとりができないと理解している。それは本来の意味での「理解」であり共通認識だ。しかしこうした認識を共有できるからこそ、理解できると思い込む。強制的に互いに等しく歩み寄って、疑似的な理解のもと、果たしてなにか生まれるのだろうか。宇宙は画一的なのだろうか。実は宇宙は平面かもしれない。三次元、四次元、いや実は十二次元だと騒いだくせに、平面な私たちを生むのではないか。

いや、もうとっくに潰れているんだ。子供の頃、人間は頭の位置がほとんど下がってきているのだから姿勢を正せと、親に散々言われた。「耳にタコができる」ほど言われた。私だって写真でしか見たことがない「タコ」なのに、「耳にタコができる」という表現はなぜか今も生きている。首が短い傾向は、一〇〇年位前から顕著になってきたらしい。このまま進むと、胸

の真上に頭、つまり首が無くなり、足は長く、かつて存在していた「イカ」「タコ」に似た容姿になるという研究者もいる。少し第七星命体に似ている。様々なツールの登場で下を向くことが増えたのが一因らしいが、なかには、宇宙に出て空を見上げる必要がなくなったからだと、感傷的な理由を加える者もいる。そんな姿になったら、どんな星でだって生きてゆけるのかもしれない。どんな環境でも生きられるということは、固有性をもたないのかもしれない。第七星命体だって、おそらく地球では長く生きられまい。が、仮に人間と第七星命体を混ぜたような生きものになったら、それは地球でも、新しい「地球」でも、第七星でも生きていけるはずだ。

二十一年前がどこか羨ましい。技術が中途半端だったばかりにとんだ事件が起きたわけだが、今となつてはもうそんなことは起こりえない。危険を回避するための画一化。完璧な歩み寄り機能。「完璧」なんて人間にはできないはずが、十六の異種星命体の叡智の融合だ。そしてそれを更に高める感覚共有。実現不可能と思われたそれも、まもなくテスト運用が始まる。

「There Tool……Here~There」わたしとあなた」「あなたを想像する」HereからThereへ互いに歩み寄るという視点からつけられた名前。悪くないネーミングだとは思う。少なくとも「地球エンジン」なんて名前よりずっと良い。が、ときどき、得体のしれない空虚を感じることがある。頭髮、表情、靴下……擬態をすることが異星命体との対峙にどれほど有効か。でもそれは

絶対に違うことの証明でもある。違うから知りたいと思う。違うから恐れを感じる。できないから、怖い。恐怖とは本来必要なことではなかったか。

やはり目を背けてはいけない。理解できないことを理解する必要がある。第五世代のツールには、過剰な歩み寄りを制御する機能、侵してはならぬ領域が互いにあることを再認識できる機能を、どうにかして組み込まなくてはならない。」

教授はそこまで考えるのをやめ、教壇へ戻った。

第一線で活躍する教授の特別講義とはいえ夏休み中だ。講義が終わると、それも予定より早く切り上げられたとあって、靴下占いの結果に一喜一憂して騒がしかったのも束の間、学生たちはそそくさと教室からいなくなり、辺りはすぐに静まり返った。

ところが教授はなかなか教室から出てこなかった。

ようやく姿を現すと隣に一人の学生を連れ、体調でも悪いのか、講義棟の出口のわずか三、四段の階段を踏み外しそうになり、学生に脇を抱えられたが、それでもまだ宙を歩くように足が縛れていた。近くを通る人も、どきついピンクの靴下から笑いかける顔を写真に収めたものの、すぐに占いの結果を確認することはせず、教授の青白い顔を心配そうに見ていた。

III

「それは昨日の講義でした。ある事件の資料を学生たちに紹介したところ、こちらの彼があのE・B論争に関する違和感を指摘したのです」

秘書に促され特別応接室に入ってきた教授は足を一步踏み入れるなり話始めた。今まさに席に着いたばかりの理事や、教授の後ろから入ってきた理事さえいるというのにまったくお構いなしだ。秘書はピンヒールの足元から、中央に一本の黒いラインを走らせたストッキングという古風な装いでコツコツと音を響かせ、全面ガラス張りの自分のブースへと戻ってゆく。ヒールの音が気に障ったのか、顔のシミが目立つ瘦身の理事がその後ろ姿に眉を顰めた。その隣では、丸顔の理事が蝶ネクタイを直しながらも大きく大きな声で「紅茶、熱いのお願ひね」と呼びかけた。その声があまりに大きかったので、教授の背後から部屋に入ってきたでっぴりとした理事はわざとらしく耳を塞ぐような仕草をしたが、それ以上に興奮した声が部屋に響いたので本当に耳を塞いだ。

「君はよく気がついた!」

教授が隣に立つ学生の肩を激しく揺り動かしている。

理事たちは驚いた。研究以外のことは知らぬ顔で、滅多に大学執行部とは口をきかない男だ。実質、輪番制の専攻長になることはあっても、業績は申し分なく、獲得している研究資金も他の研究者に大きく水をあけているというのに、周囲から研究所長へ推薦されても頑なに断る。学内行事の宴席に出席しても、研究の話題になるとよく喋るが、政治的な話には一切口を出さず、代わりに料理を詰め込み続ける（ある研究者によると「最近接触してきた新しい星命体の真似をしているのです。ひたすら口に物をいれる奴らなのです。先生曰く、真似ることは相手を知る近道とのこと」）。研究に全身全霊をささげているそんな男が、早朝から「話がある。学長を出してくれ」と本部に現れ、隣には所在なさげにキョロキョロしている学生を連れている。教授は、学長は出張で不在だと知るや否や、出勤している理事はいないかと彼ら四人の部屋の扉を叩いて回った。職員が慌てて、まずは居留守を使っていた理事一名、それから通勤途中の理事三名に連絡をし、最終的には学長からの許可も得たうえで、この特別応接室で話を聴くことに落ち着いた。

ここにいる全員、ガラスのブースの中で座っている特別応接室専属の秘書以外は、はじめてこの部屋に足を踏み入れた。今日に限ってどの会議室もすでに予定で埋まっていた。教授の話が十分程度でおさまるなら使えないこともないが、手短に済むようには思えない。では、通常の応接室はどうかというと、学長室と繋がっているので彼女の不在時は使用できない決まりに

なっている。そこでこの特別応接室が急遽開放されたのだった。「特別」といっても他の会議室と特に変わらないと理事全員が思った。強いて挙げるなら、ガラスの小部屋にいる古臭い服に身を包んだあの秘書だ。まるで服飾史の資料から飛び出したかのようなピンヒール、タイトスカート、襟と袖に幾重ものフリルがあしらわれたブラウスを身につけている。どの理事も彼女をこれまで見かけた記憶がない。しかしそれ以外は、歴代の学長の肖像画や古めかしい調度品が並んでいて、他の部屋と大差ない。そんなことを考えながら四人の理事が態勢を整える反対側で、教授と学生はデバイスや本、資料を次から次へと鞆から取り出し、手当たり次第机に積み上げて、ちょっとした雪崩まで起こしている。

「これはいらない」

「はい」

「いや、一応おいて置こう」

「先生、さっきお話したのはこの付箋の部分です」と二人は忙しい。

実は誰よりも早く出勤していた居留守を使った白髪の理事は後悔していた。朝から面倒事に巻き込まれたくないと卑怯な手を使ったが、教授の興奮した様子に、これは本当に大きな発見をしたのではないかと思えてきたのだ。教授も、猫背気味のひょろっとした学生も目が輝いている。久しぶりに耳にした「E・B論争」には全く食指が動かないが、ちょっとやそつとの発

見なら、この教授が学生まで連れてわざわざここへやって来るなどないだろう。相当な発見をして発表が必要になり、まずは執行部へ報告に来たのか。それともこちらの判断なくして動かせぬ予算が欲しいのか。いずれにしても、最初に自分が対応していれば、大きな成果の統括者という立場を一人でものにできたかもしれない。どうせほかの理事三人は、仕事を増やしたくないか、あるいは政治的に靡かない研究者には無関心だ。対応を誤ったと白髪の理事は心のなか舌打ちをした。

他の三人の理事は、「十九年も前に決着がついている論争をなんで今更」「まったく。しかもこんな朝早くから」と小言を交わしている。その向かいでは、準備を終えた教授が、そうしなくては喋ることを抑えられないのか、かっと目を見開き、今にも大量の虫でも吐き出すのかというくらい唇をもそもぞとさせて立っていた。

白髪の理事は大袈裟に一呼吸おくと、ゆっくりと顔の前で手を組みながら言った。

「我々にも関係するからこそ、先生はここに來られたのでしょう。うかがいましょう。できれば順を追ってお話いただけると大変ありがたい」

隣でつぶりと太った理事がふんと鼻をならした。教授は名乗ることもせず、片手に持つ「There Tool」を掲げて早速話し始めた。

「皆さん、承知の通りこの「There Tool」は、異種星命体の様々な情報をそれぞれの言語等に置換

し、相手のことを理解するためのツールです。ごく簡単に言えば翻訳機。ツールには人間、それ以外の星命体のあらゆる叡智が集結しており、私は主に言語、つまり文字や音声に関する研究を通してツールの開発にかかわってきました。しかし長年研究しても、いまだ実装化できずにいる機能があります。感覚の共有です。例えば、私と皆さんとは同じ林檎を食べてもまったく同じように味を感じることはありません。人間同士でさえ感覚の共有は困難ですから、異種星命体同士となると、もはやどこから手をつけたらよいのか見当もつきませんでした。そもそも、異種星命体は人間と同じ感覚を有しているとは限りません。その逆も然り。いや、共通するものなどほとんどないに等しい。

例えば味覚をもたない相手へ、私の味覚をどう伝えたらよいでしょう。想像してください。私がチョコレートを口に入れたとします。甘いと思って食べますが、酸っぱさと苦味だけを感じた。砂糖が入っていなかったのです。私は顔を顰め、吐き出した。その様子を味覚をもたない星命体が見ていたとしましょう。私が相手へ質問します。『私が今、どんなことをしたのか説明してください』すると、相手はツールを介してこう返してくれるでしょう。『紺色の服を着た人間が茶色く小さな硬いものを口の中に入れた。その人は顔の状況を変え、中から茶色く柔らかいものを出した』と」

教授は、あちこちに目を動かしながら、しかし腹話術のように口を動かさずこう話した。白

髪の理事は顔の前で組んでいた手を解くと、頬杖をつき、背もたれに寄りかかった。

「私があちこち目がいつちやった感じで話したのは、その星命体は発話時、口ではなく目が動くからです。味覚以前に、口そのものを持ちません。いや、今はそんなことはどうでもよい。

とにかくこんな感じで私の状況を教えてくれます。ですが、このとき私が感じた味は、現在の技術ではどうしたって彼らには伝わりません。だってかれらには味覚がないのですから。仮に、『ではなぜ私は茶色いものを出したのでしょうか?』と尋ねてみましょう。あるいは、そもそも彼らに口があったとして、チョコレートを食べてもらい、感想をききましょう。答えはどちらか『わかりません』味覚がないから、そう答えるよりほかないのです。かれらは質問を理解できないときや認識できないとき、必ず目を一つだけ閉じる習性があります。だから私もいま右目を閉じました。ウイंकではないのであしからず」

背もたれごと後退った白髪の理事に、でっぷりした理事がウイंकした。突然、瘦身の理事がか細い声で学生へ向かって、「ところで君は確かレイチェル教授のゼミの——」と話しかけたのだが、同時に蝶ネクタイの理事が紅茶を啜り、「へえー、それは口がないんだ」と素っ頓狂な声を上げたせいで、続く言葉は掻き消されてしまった。瘦身の理事は隣の蝶ネクタイと、トレーを持って遠ざかるピンヒールを交互に睨んだ。

教授は続ける。

「感覚を共有できないことで、人間にも他の星命体にもこれまで多くの不都合がありました。感覚共有機能の実装は喫緊の課題で、私は直近の十年以上を、その解決のために費やしてきたようなものです。ようやくテスト運用が一年半後に始まりますが、まだまだ先は果てしない。そのためには、あらゆる星命体を観察できる新しい人材を育てることも必要不可欠です。昨日から始まった特別講義もその一環。まずは小手調べということで、二十一年前、地球の宇宙船が第七星命体に襲われた事件を題材に講義をおこないました。そうです。E・B論争のきっかけとなった事件です」

「懐かしいなー。ケンケン論争ね」

蝶ネクタイの理事が手を叩いてはしゃいだ。

「二十一年前となる。There Toolは第二世代。当然、今に比べ性能は劣ります。ツールの穴や、人間と第七星命体との違いに学生はどれくらい気がつくことができるか。まずはそれを調べたかった。皆さんも思っておいででしょう。いまさら、E・B論争だなんて、と。私も論争そのものに注目していたわけではありません。学生が先入観をもっていない程度に過去の出来事で、資料もある程度一般に公開されている、そして明確な結末、つまり講義における問と解を設定しやすいものが望ましいと考え、この事件を選んだのです。ご希望のとおり順を追って、まずはこの事件のあらましをお話しましょう」

教授はやや前のめりになっていた姿勢を正してから語り始めた。

「二一四〇年、人間の宇宙船二〇八八三六号が凍山銀河付近をルツ星へ向かって航海していた。乗船員は同じ研究所に勤務する人間五名。その近くを一体の第七星命体が宇宙バグで飛行していました。この第七星命体は人間の宇宙船へ興味を抱き、交流のため船の停止を求める信号を送ります。この時点では人間を襲うという考えはなかったと、後に第七星命体は供述しています。

異種星命体同士の接触時はツールが必須。船に乗り込むにはツールを互いに起動させなくてはならず、一旦起動させると互いに歩み寄ることが強制されるため、相手を襲うことなど不可能です。ところが、第七星命体はツールを使うことなく人間の船に乗り込むことに成功してしまった。なぜなら、人間側が、『交流検討中。一時待機を求む』と交信すべきところ、誤って入船を許可するときのボタンを押してしまったからです。それも人間を迎い入れるためのボタンを、です。担当した運行責任者は、他のことで頭がいっぱいになっていたのかもしれない。今となっては起こりえない事案ですが、この頃にはまだこうした人為的なエラーも発生していました。

一切の抑止力も強制も機能していない人間の宇宙船に偶発的に入り込んだ第七星命体は、天井の排気ダクトを通して船の中央に位置する部屋まで進みます。そこでは人間が言い争いの真

最中でした。頭上に異種星命体が潜伏しているというのに気づかなかった人間たち。彼らが揉めていた理由、それがE・B論争でした。

このエビス・ブラッドショー論争とは、今日宇宙において最も広く利用されている宇宙船用の進化型クリーンエンジン、その開発者が同じラボに所属していた蛭子賢えびすけんであるのか、それともケン・ブラッドショーであるかという議論です。二〇九六年に開発され『エビスエンジン』と名付けられた通り、開発当初から四〇年以上に渡って、このエンジンは蛭子賢という研究者によって開発されたと考えられてきました。しかし、ある時から研究者界隈で蛭子賢に疑惑の目が向けられるようになり、この第七星命体による襲撃事件で論争が表面化、その後中央政府の調査を経て、蛭子賢の功績には疑問符が付き、今から一九年前にはエンジンの名前も変更されました。

事件が起きた二一四〇年時点では、この論争は業界内での噂にすぎませんでした。第七星命体が侵入した宇宙船二〇八八三六号には蛭子賢、ケン・ブラッドショー両者の孫が乗船していました。なぜか、どちらの孫も祖父と似た職業に就き、同じ研究所に勤務。どこまで偶然かはわかりません。が、もともと孫同士に交流はなかったとされています。ちなみに蛭子、ブラッドショーにはそれぞれ息子がいましたが、両家とも父と息子の関係はよくなかったようで、息子が宇宙に関する仕事に就くことを許さなかったとか何とか。そのため、両家とも、孫と祖

父も疎遠だったことがわかっています。しかしながら、孫は祖父に近づき、結果、悲惨な事件に巻き込まれてしまいました。混乱しないように、二一四〇年の宇宙船の船員は、蛭子孫、ブラッドショー孫。彼らの祖父、つまり論争の当事者であり、エンジン開発時の二人を蛭子祖父、ブラッドショー祖父と呼ぶことにします」

「それはやめて」

蝶ネクタイの理事が異を唱えた。

「だめ。エンジンに関わった祖父はBとE、孫をそれぞれB孫、E孫にしてよ。だってたまたま二人ともBとEがそのまま頭文字だもん」

教授は同意して再び話始めようとしたが、再び理事が「KKならもっと面倒くさいね。ハハ。でも、当時から思っていたんだけれど、初めからエンジンの名前を『ケンケンエンジン』にしておけばよかった話ではないんだろうかね」とはしゃぎ、学生だけがつられて声をだした。話を再開した教授の横で、学生は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「噂の始まりはある日記でした。B孫のもと、古い日記が送られてきました。日記の主は、E、Bたちの元同僚でその一年前に他界していたあるエンジニア。B孫は日記に、Eが本当にエンジンの開発者であるのかどうか調査すべきだという記述を見つけました。

一度、BとE、つまり祖父の世代に話を移します。舞台は二〇九〇年代の地球。研究所の同

じラボに勤務していたE、Bは外見こそ対象的でしたが、共通点も多くありました。Eは背が高く筋肉質。その上、スキンヘッドだから目立ち、一見活発な印象を与えますが、寧ろ黙々と細かい作業に集中する職人気質なところがあり近寄り難いタイプ。頭の回転が速いことに加え、手先がすこぶる器用だったようです。正確無比で、ネジなど細かい部品も自ら加工することばかり。一方、Bは責任感が強く、親しみやすい笑顔が特徴でリーダーを任せられることが多かった。プログラミングや計測に秀で、スイッチが入ると寝る間も惜しんで研究に没頭する。二人とも、ひとたび仕事をはじめると休憩までは無駄口は開かない。Eなんて、食事をとっている姿を見たことがないと言われていたほどです。そんな二人が同じ空間にいると、緊張感は相当なものでしたが、それが研究室の個性となり、優秀な若者が多く集まるラボだったようです。

それまでは高額な宇宙保険に加入できる人たちにだけ許された地球外への移住でしたが、二〇八〇年代に入ると、いよいよ地球環境の最終的な悪化が予測され、誰しもが地球外へ移住できる状況を整えなくてはならなかった。それには、限りなく安全性の高い物質を用いて、軌道操作も的確に行えるエンジンが必要でした。日夜問われない実験はもちろん、それ以上に大きなプレッシャーを背負ってもびくともしないタフさがあり、外野の騒音など気にせず自分のペースを貫ける者がこの地球全体のミッションを成功へと導く、そうしてそれは当然この二人だと

目されていました。

ところで、研究員たちが入り浸っている実験場には、当時はまだ生存していた牛の放牧場が隣接していました。隣といっても三百メートルも離れていましたが、動物のにおい、とりわけ牛糞の臭いは、様々な化学物質、火花が散る近くで汗と金属がまじりあったケトン臭などと混じって、エンジンアの作業着にはいつも独特なおいがかもつていたと言います。その臭いは強烈で、しかも彼らは研究所に泊まり込むことも多かった。そのため実験場には、作業着や靴専用の洗濯乾燥機、シャワールームも完備されていました。よくある緊急用シャワーではなく、エチケットとしてのシャワールームです。ところがそんなことに構っている余裕などなかったのでしょう。利用する人はそれほど多くはなかった。例えば実用化に至るまでの二年間、Eは一度も使わず、Bもわずか二回との記録が残っています。当時実験に用いられた装置や彼らの作業着は、現在も貴重な資料として中央研究所で厳重に保管されています。私も実際に見学したことがあるのですが、それらはいまだ相当な臭いを放っています。ちなみに私が訪れたときにはEの資料はすでに撤去された後でした。悪臭も気にならないほど二人は実験にのめり込んだ。関係者の証言や資料からそれは確かなのですが、このにおいにある疑問を嗅ぎとった者が現れました。B孫に送られてきた日記の書き手である、EとBの元同僚です。

エンジン開発から十六年後、彼らの古巣の研究所は別の機関と統合して再編成されることに

なりました。その開所式のため、かつての仲間たちが久しぶりに集まりました。Eは開発後も研究所に残り新しい研究所のトップに就任。一方のBは実験成功の翌年に他機関へ転出しており、十七年ぶりの再訪でした。そこに日記の主である女性エンジニアも出席しました。ここでは彼女を『K』としておきましょう。Kの日記によるとこうです。

Eの計らいで式典の前にみんなで所内を見学した。懐かしい建物も当時の面影がない場所もいろいろ。思い出深いあの実験場と牧場は新しい研究棟に。

すごく素敵な建物。でも、牛がいらないのにあのにおいが蘇ってくるように皆で笑った。書いている今もあのおいが漂ってくるみたい。

でもやっばりEだけは反応なし。

当時もそうだった。どうして？ Eは話にも加わらなかった。

あの頃と比べるとよく喋るようになったせいかしら、余計に違和感。

Eは無口な男には違いない。研究室で一緒だった頃、皆で議論を交わしても、聞いているのに発言しない。が、皆が黙ると発言し、それが的を射ているから一目置かれていた。しかし、話に割り込まない点が美徳かといえればそれは違う。ほとんど瞬きをせずに皆の話を聞き、一段

落つてから鋭い指摘やアイディアを提供するものだから、他のメンバーは常に試されているようで緊張を強いられたと述べています。食事を共にする機会もなかったらしく、たまに同席しても一言も口をきかなかったようです。プロフェッショナルと言えば聞こえは良いものの、極端なあまり、人によっては煙たい存在でした」

でっぴりした理事が教授に向かって微笑みながら何度も頷いたが、教授はなにも反応を示さなかった。

「しかし研究所長にまでなったように、久しぶりに会ったEは、当時とは打って変わって碎けた会話も気さくに交わすようになっていたそうです。それなのに、仲間で一番盛り上がる話には知らぬ顔。式典後のバンケットも、重要な会議があるからと挨拶だけして、後は副所長に任せて退席すると旧友たちに告げていました。式典の日を重要な会議の日にセッティングするだなんておかしい。バンケットを欠席する口実ではないだろうか。怪訝に思ったKは、式典の間、旧友たちにそんな疑問をぶつけました。すると、多くの口からEに対する不満や違和感が飛び出しました。自分が中心となる晴れの舞台のバンケットに出ない。牛の話にも一切反応しない。柔和になったと思ったものの、結局は表面上に過ぎず、何を考えているかわからない。近況は教えてくれるし尋ねてもくれるが、思いついた話ばかり歓迎していないように見える。まさに臭い物に蓋をするようなふるまいではないか。皆であだこうだと話すうち、Eがどの程

度エンジン開発に関わっていたのか疑わしい、そして、本来はBが賞賛されるべきではなかったかという話にまで発展しました。日記の主はさすがに妄想が過ぎると窘めたそうです。が、あれほど強烈で身体にも記憶にも染みつく臭いをどうして無視するのか理解しがたく、《Eはまるであの臭いを知らないようだ》とKは思いました。一度そう思うと、《Eはよく別室にいた。実際に何をしているのか、得体がしれないところがあった》《自分たちが帰った後もずっと研究所に残っていたけれど、一体何をしていたのか、詳細を知っているとすればBくらいのもの》と、彼女のなかで、疑問はどんどん膨れ上がりました。

実は、エンジンの実証実験が成功するまで、プロジェクトの重要なデータは主担当であるEとB、それから研究所の責任者数名だけが握っていました。地球全体のミッションということ、で機密性が高く仕方のないことでしたが、当然それを良く思っていない仲間もいたそうです。日記には、Eに対する疑惑の声の大半は、当時Eの厳しさについてゆけず研究室の隅に追いやられたと考えている者や、その後Eが順調に出世したことを妬む者から上がっていたと書かれています。ちなみにK自身は、不愛想だが確実に作業を進め、その後もエンジンを改良し、実力でここまで出世したEという研究者を、評価こそすれ嫌っていたわけではないようです。実際にこう書いています。

どうしてあの臭いに何も言わずにいられるの？ 不思議でしかたない。面白味がない人だとは思っていた。でも奇異にさえ思える。変わった人ではあったけれど、なんだかおかしい。彼の能力と勤勉さを思えばトップになるのは当然。あれほど口下手な人がよくここまで出世できたと感心する。努力を正當に評価した上層部もたいしたもの。

でもおかしい。どうしたって違和感がある。今の状況？
ちがう。きつとあの時からなにか変。
でもなにが？ Eはなにかおかしい。

旧友たちとEを語ると必ず感情論に陥ってしまう。仕舞には、Eと同様にプロジェクトを担っていたBに対する不満もないまぜになつてしまいうらしく、彼女はそうした声は話半分に聞き、もっと冷静に話ができる相手はいないだろうかと考えました。適任者はすぐに思い浮かびました。しかし、うまくゆきませんでした。適任者は勿論Bです。日夜Eと共に働き、彼のことをよく知り、他の旧友に比べてEに対する反感や嫉妬が少ないのはBに決まっています。Kはバンケット会場でBを探しました。ところが見つからない。見学時は一緒だった。開所式にも確かにいた。受付に確認すると、バンケットへの出席予定はなく、すでに帰ったのではとの

回答でした。式典事務局にも掛け合いましたが、連絡先を知ることとはかないませんでした。

しかしKは諦めず、翌日、忘れ物を渡したいが本人の連絡先がわからないと言って、Bの勤務先の代表連絡先に問い合わせをしました。ところが、Bに関しては本人が許可している相手以外のコンタクトは一切を断っていると即答されてしまいます。Kは食い下がったようですが、結局Bの連絡先はわからず、自分の連絡先を伝言したものの、Bから連絡が来ることはありませんでした。当時は宇宙に関するあらゆる業務量が劇的に増えていた時期です。管理職として若手エンジニアを率いていたKも忙しく、《なにか変》という違和感も次第に遠のいてしまいました。こうしてEに対する疑問は仲間内での噂の域を出ることはなく、日記の中に埋もれたのです。関連の記述は次の文章で終わっています。

たしかあのとき、私が牛の話をしたんだ。それでみんなで笑った。

けれど、Eが話題を変えたんだ。ちがう！ BがEに何か尋ねて、

みんなまだ牛の話で盛り上がっていたのに、話題が変わってしまったんだ。

まさかBはわざと？

そしてKは日記の送り先としてBの名前と所属先をメモしました。

二十八年後の二一三八年、彼女の日記が発見され、翌年B孫の手に渡りました。はじめB孫は親しい友人数人にだけ、日記のことを明かしました。が、誰もが知る、しかも研究者界限では英雄視されているEに関する話です。黙って聞いているだけなどありません。何気ない疑問に発見を予感した若者たちは中央研究所も巻き込んで、秘密裡にはありますが、Eがエンジン開発にどの程度関わっていたのかを調査することになりました。と言ってもごく簡単な調査で、Eの評価を貶めるような目的ではなく、単純にEとBが担当した業務範囲を確認してみようというような軽いものでした。短期間で中央研究所が調査を実施した理由を、実は中央研もEに不信感を抱いていたからではないかとか、E孫が横柄な態度で不評を買っていたからではないかとかする向きがありました。が、私は違うと思います。彼らは皆、ただ真実を知りたかったのではないでしょう。Eが牛の話を避ける。パンケットにも出席しない。まるで過去の思い出などなかったようにふるまう。Eのそんな姿にKやB孫が想像したのは、皆さんもお気づきの通り、Eが自分の名声を勝ち取るために何か不味いことをしたなんて、そんなつまらないことはありません。

中央研究所による調査で一つの発見がありました。二一三九年の調査時点では、Eの作業着もBや当時のメンバー同様、貴重な資料として中央研究所に保管されていました。それを調査したところ、Eの作業着から検出されたにおい成分と、Bや他のエンジンアあるいは共有して

いた装置から検出されたそれとは、微妙に成分が異なっていたのです。検証はそこでストップしました。思いがけない結果を得た中央研は、これ以上詳しく調査するためには亡きEの親族の承諾が必要と判断しました。そこでB孫と検証に立ち会ったAらは、とある出張の復路を狙ってなんとかE孫から調査への同意を得ようと考えたのです」

教授はバンと音を立て両手を机についた。それからどうだと言わんばかりに目を見開いて四人の理事を左から順に追った。しかし誰も何も言わず、教授は深く息を吐くと、すでに冷たくなっていた紅茶を立ったまま飲みほした。つられたように何人かの理事がカップを口にあてたが、すでに飲み終えていたのか、白髪の理事がガラスの向こうにいる秘書におかわりを頼んだ。しかし彼女は仕事に集中しているのか気がつかない。蝶ネクタイの理事が声をかけようと立ち上がったが、教授の話が再開し、空のティーカップはそのままになった。

「偶然でしょうが、実に運命的です。このEとB、二人の孫が同じ組織の一員となり、彼らの船に異種星命体が侵入した。偶然にしては出来過ぎています。が、宇宙は流れ続けているもの。すべては偶然にすぎないというのが私の持論です。本当に偶然なのかどうかはこれから客観的な検証が必要でしょう。もし第七星命体が事件を起こさなければ、孫同士の話し合いはとうなつたのでしょうか。E孫は調査に同意したのでしょうか。それは今後もわかることはありません。しかし、どちらの孫も亡くなるという痛ましい事件が日記が発見された翌年の二一四〇

年に起きたことよって、噂は『蛭子・ブラッドショー論争』として世間に知られることになりました。そして誤解が生じたわけです。実際はエンジンを開発したのが誰かなどという単純な話ではなかったのに。

が、まずは論争を終わらせましょう。二一四〇年の事件後、この論争は中央研の手を離れ、地球政府主導のもと調査委員会が立ち上がり、結果『エビスエンジン』は『地球エンジン』という、端的ですが気の抜けた名称に変更されました。委員会による報告書の結論は、大雑把にまとめてしまえばこうです。『ケン・ブラッドショーによる貢献が著しく大きいが、その他複数の研究者および技術者の功績であると考えるのが妥当である。』気の抜けた名称にふさわしい結論でしょう。『その他複数名』とある以上、名前は外されたところで、蛭子賢の尽力は否定されていないわけです。

ネーミングセンスは最悪だが、地球政府は悔れない。重要な役割を果たしました。検証の過程で大きな、しかし当時は注目されなかったある発見をしたのです。

Eの持ち物から検出されたにおい成分のうち、牛糞をはじめ一部が人工香料だったことが判明しました。これはE以外の持ち物や共同の装置や工具からは検出されていません。また、Eが身に付けていた手袋や作業着からBの毛髪が採取されました。それも、二人が一緒に働いていた当時の毛髪ではなく、再会した二一〇年から数年以内の毛髪が付着していたのです。こ

これから導かれることとして、調査委員会は『あくまでも推測である』と前置きし、次の見解を発表しました。『Eはエンジン開発にはさほど関係していなかった。しかし二一〇年に再会した際、EはBに圧力をかけ、自身も開発に関わっていたように見せかける偽装工作进行を指示した。結果、Bは中央研究所に保管されているEの物品に自分たちの物品に付着しているのと同じにおいを吹き付けた。しかし、二一〇〇〜二一〇一年当時、すでに牛は絶滅していたため、牛に関するにおいては人工香料に頼るしかなかった。故に、Eとそれ以外の物に付着している成分が異なる』と。実際、二一〇一年秋に、Bが調査目的で中央研究所の資料館を訪れたことがわかっています。わざわざクリーンルーム用の防護服まで持参していたことも判明しています。が、なぜか頭を出した状態で偽装工作をしたために毛髪が残ったと考えられています。それはにおいて確認する必要があったからではないかと指摘されています。

論争終結後、巷ではこんなことがよく言われていました。実験成功後、すぐにBが研究所を去ったのは、自分に指図し、手柄を横取りしたEのことが許せなかったからではないか。Eはその後研究所長にまでのし上がり、Bが去ってから彼を裏で支配していたのではないか。しかし、私は腑に落ちませんでした。なぜなら、偽装工作するなら開発していた当時にすべきです。牛が感染症で一気に絶滅するとは思ってもみませんでした。あの頃の次から次へと襲ってくる感染症を思えば、優秀な頭脳をもつ科学者のなかには、それを予測した者もいたかもし

れない。ましてやEやBのようなすこぶる頭の回転が速い連中であれば、偽るならばもっと用意周到に事を運んだはず。なぜ、再会したあとの偽装工作なのか。開発からしばらくは目が回る忙しさだったからでしょうか。違います。忙しさで後回しにする程度のことならば、十七年も経って、わざわざ取り繕うことなどしません。仮に、における地層を偽る技術が開発されたというならば、十七年後の工作も、まあ領けます。が、そんな技術ははまだ開発されていない。そもそも、なぜににおける偽装したのか……。私は何かおかしいと思うものの、日記の主と同じで、私自身の研究が忙しく、そう、人間のことなど頭から消えてしまいました。私にとっては少しも重要な話題ではありませんでしたから。

話は昨日の講義へ戻ります。先ほどもお話したように、二十一年前も前のこの襲撃事件の詳細を知っている学生は多くはないだろう、だから新鮮な視点で対象を考察できる、そう考えて私はこの事件を題材に取り上げました。小テストの設問は次の二つ。裁定プログラムの記録および船内の映像データをもとに、一部訳を書き換えた部分を抜き出し、書き換え前との違いを記述せよ、また、人間の五感の一部が第七星命体ではどのように感知されているのか述べよ、という二問です。学生の食いつきは悪くなかった。回答のため、制限時間を三十分設けました。十五分ほど経過した頃だったでしょうか、一人の学生が手を挙げました。それがここにいる彼です。『教授、これは訳の違いを抜き出して、違いを説明する。それと第七星命体と僕た

ちの感覚の違いを記述するだけでいいんですよ」と時間が残り半分になってから当然のことを質問する彼に呆れたものの、『その通りだよ。どうかしたか』と返しました。すると彼は挙げていた手はそのまま、立ち上がりながら『ちょっとよろしいですか』と小走りにこちらへ向かってくるではありませんか。私は決して親しみやすい人間ではありません。皆さんもそう思っておられるでしょう。それなのに誰かが駆け寄ってくる。そんなときは、たいいてい研究関連のビッグニュースがあるか、なにかの期限延長の申し出、そして靴下占いのためです。この学生の表情には真剣なものがある。私は少し構えました。彼はこう尋ねました。

『もう一つ設問が用意されているということはありませんよね？』

『どういう意味だ。追加の問題などないよ』私がそう言うとき彼は、問題は解き終わったが気になることがある。残り時間で、E・B論争について調べても構わないかと尋ねました。なにかひらめいた彼の様子に、私は詳しい話を講義後に聞きたいと伝えました。そして彼の解答が確かに私の端末に届いており、記述もしっかりとできていたので、残りの時間は調べものにあてなさいと検索機能をアンロックしました。『ここに載っている資料なんてわかりやすくまとまっている』という情報も付け足してね。すると彼は私が指し示した文書をものすごい速さで目で追うと、『そうか……じゃあやっぱり単なる想像とも言切れないんだ』と呟き、一礼すると席へ戻ってゆきました。が、今度は話の続きが気になって私の方が講義に身が入りません。

あの学生は一体何を発見したのだろうと考えるとうずうずして、残り時間を持て余している多くの学生とは対象的に、いつまでも資料のページを進めたり戻ったり、はたと制限時間のことを思い出すと、すでに残り一分となっていました。そして全学生の解答データを回収し終えると、予定していた解説は明日にまわし、少し早いものの、その日の講義は終了となりました。

私は彼とそのまま教室で話をすることにしました。スクリーンに彼の解答、関連する資料を並べて解説をしながら、『模範解答じゃないか』と言うと、彼はほころばせるところか緊張した面持ちでスクリーンの内容を切り替えたいと言います。表示されたのは、E・B論争の基本情報、第七星命体の概要、それから数字の羅列でした。その横に彼が文字を書いてゆきます。年表をつくらうというわけです。今ここでそれをお見せしましょう」

教授が卓上のボタンを押すと、会議室に透明なスクリーンが現れた。徐々に乳白色、もっと濃くなり、真っ白になり、年表が映し出された。

2094 年	クリーンエンジンの実証実験連続成功
2096 年	『エビスエンジン』完成 人間が本格的に宇宙へ
2104 年頃～	異種星命体と頻繁に遭遇するようになる
2110 年	・ 某研究所開所式にてエンジン開発当時の メンバーが約 16 年ぶりに再会 → 2111 年、B による偽装工作？ ・ K により日記書かれる（E への疑惑浮上）
2126 年	交流を希望する星が集うようになり、組織を つくる案が浮上
2130 年	組織の構成星がほぼ決まりツールの開発が 加速
2136 年	・ 16 クラブ結成 ・ 初代 There Tool 完成
2139 年	B 孫に K の日記届く
2140 年	・ E に関する簡易調査実施 ・ 第七星命体による人間襲撃事件発生 ・ E・B 論争表面化
2141 年	E・B 論争の調査委員会が発足
2143 年	最終報告書が公開され、エンジン名は改称 『地球エンジン』に
2161 年	新たな発見？？？

教授は理事たちが目を通したのを見計らって、「彼から説明します」と学生の肩に手を置くと部屋に入って初めて腰を下ろした。代わりに立ち上がった学生が名前と所属を名乗ると、「やっぱりそうだ」と言って痩身の理事が納得したように頷いた。学生は一瞬氣をとられたものの話し始めた。

「資料を読んですぐに気になりました。第七星命体は存在感が薄いのに、二一四〇年の時点で随分と翻訳が進んでいたんだなと思ったんです。普段の生活で名前を聞くことはないし、「七」と聞いてもどんな星命体かすぐにイメージできません。初代ツールの登場から事件までは約四年です。その間にツールは第二世代へ進化しています。たった四年でこんなに自然な翻訳？　いくら先生方が熱心に研究したって、他にも対象となる星命体は沢山いたんだから、どうしてこんな精度の翻訳が可能だったのか。ひょっとして第七星命体とは、古くから交流があったのかも？　漠然とそう思ったんです」

「彼の指摘を受け、私は過去の資料にあたってみました。しかし、第七星命体と初めて接触した年がいつであるのか、はっきりとした資料はいまのところみつかっていません。二一〇四年頃、何種かの異星命体と遭遇した、そのうちの一種とあるだけです。ということは彼が指摘する通り、もっと早くから接点があったとしてもおかしくはない。当時第七星命体を担当していた研究者からの回答を待っているところです」

そう言うと教授はいくつかの情報を年表へ追加し、もう一つスクリーンを追加すると講義で
使用した映像を流し始めた。



2092年冬 Eが開発チームに加入

2094年 クリーンエンジンの実証実験連続成功

2096年 『エビスエンジン』完成、人間が本格的に宇宙へ

2104年より前に第七星命体に接触？

2104年頃～ 異種星命体と頻繁に遭遇するようになる

2110年

- ・ 某研究所開所式にてエンジン開発当時のメンバーが約16年ぶりに再会
- 2111年、Bによる偽装工作？
- ・ Kにより日記書かれる（Eへの疑惑浮上）

学生が言った。

「映像を見て変だと思いました。この小さな壇には実験場に漂っていたという臭いが入っていたことは明らかです。正しくは再現した臭いで、多分濃縮されていたのだと思いますが。B孫はそれをE孫に嗅いでもらって、更なる検証への合意を取りつける試金石にするつもりだったのでは？ だとEの孫は無反応で、話は先へ進まなくて、そこへ事件が起きた。ぼくはリアルタイムでこの事件を知ったわけじゃないので変だと思いました。きつと、当時この事件を知った人たちはこのあとの凄惨な出来事に意識が全部持っていなくて、そんな余裕なかったんじゃないでしょうか。これ、どう見たって、Eは臭いを感じていませんよね。多分、すしも。まわりもそんなE孫に驚いているようにしか見えない。ぼくの『変だ』とEの同僚たちの驚きは、Kの日記の《なにかおかしい》と一致します。

それからもう一つ。これは授業後、先生と一緒に年表を作っていたときに気がつきました。実験成功から実装まで二年です。これも短くないでしょうか。それまで試行錯誤していたのに急にエンジンの性能が上がった。ここにもなにか理由がある気がします」

「彼の指摘を受け、私はあることを思い出しました。Eがエンジン開発に加わったのはいつだったか。調べるとEが加わったのは二〇九二年の十二月です。以降、成功回数は右肩上がり。他の研究所でのポストドクを経てやってきたというE、彼がラボに加わってからというもの

開発スピードがぐんと加速し実用化までに至った。すっかり忘れていましたが、だからこそ『エビスエンジン』という名がつけられたのです」

そういうと教授と学生は顔を見合わせ、今後は理事たちの発言を待つかのように前を向いた。が理事たちは寧ろ二人の発言を待っているように口を閉ざしたままだ。教授は一瞬肩を落としたが、すぐに威勢を取り戻した。

「彼から指摘を受けた私はテストを受ける学生かのように、供述調書、映像、そしてこの年表にかぶりつきました。どうです。皆さんもすべての資料をご覧になりませんか。そうすれば自ずと気がつかれるはずだ。とんでもなく大きなことに。いや、もうさすがにわかっているでしょう」

でっぴりした理事が「先生、楽しそうですね」と笑ったが、他の三人の理事は黙って教授を眺めているか、焦点の合わない目をして耳を掻いているか、蝶ネクタイをいじっている。天を仰ぐ教授に代わって学生が言った。

「十六クラブが結成されたとき、たくさん星命体がお互いの共通点と相違点を洗い出しました。だから第七星命体と僕たちの違いも、実は事件発生前からわかっていたはずです。でもそこに思い至らなかったのは、未知の段階では相手を怖がって自分たちとの違いばかり気にするのに、相手に害がないと思うと、今度は同じ部分ばかり見つけようとする。僕たちはいつの時

代もそんなことを繰り返しています」

一向に表情が変わらない理事を横目に学生と教授は力なく笑った。が、教授は背筋を正すところ切り出した。

「あらためてこの事件を振り返って気がついたこと、それは、Eは、おそらくE孫も、第七星命体、あるいはそれと人間との混種なのではないかということです。彼が言った通り、第七星命体と人間の違いはクラブ結成前に判明していました。しかし、異星に歩み寄ることを優先した私たちは、彼が言った通り、共通点を意識するようになった。事件が起きても第七星命体の特徴に気がつかなかった。いや、もちろん捜査や裁定の過程では気がついていたので。しかし無頓着だった。あるいは、歩み寄り機能による弊害で気にも留めなかった。第七星命体には嗅覚がありません。空気中の分子自体は感知しますが、人間にとってののにおいには感じません。第七星命体は強烈なにおい分子を感知すると目が内側に反転します。第七星命体は複数の目があり、その数は二十とも三十とも言われ、個体やその時の状態により変化します。『におい』が発生すると表向きは目が消えたように見えるのですが、実際は反転しているのです。実はこの反転状態で『におい』を浄化させていると言われています。『におい』が消えるとは表に戻ります。自らの生理現象だけを頼りに『におい』を消す場合、相当な時間が必要です。つまり長い間、目が反転する。が、そこに風が加わることで『におい』は容易に消

失します。要は換気のようなものです。外部から風圧がかかると、自らの生理現象が加速され『換気』が短時間で済む。エンジン開発当時の地球にはいつでもどこかで風が吹いていました。精密機器を取り扱い、粉塵除去が頻繁な作業場では尚更です。だからいつも実験場で風を浴び、自らの生理現象で『におい』を消していたEの持ち物にはにおいが付着しておらず、その血をひくE孫にとってもにおいは存在しないものだった。気になるのはE孫の白目を剥くという動きです。祖父であるEに、頻繁に目を瞑る、あるいは白目を剥くといった記録はありません。が、実験用の保護メガネをかけていることが多く、それに互いの顔を見つめながら仕事する人はいませんから、実際のところは不明です。また、孫の場合も、この映像以外で白目を剥いていたという記録は今のところ見つかりません。おそらく、ある程度の『におい』には耐性があり、強い臭気だからこそ反応したのかもしれない。E孫の反応を確かめる必要があるのですから、あの壇の中にはよほど強いにおいが入っていたのでしょう。

年表を見てください。エンジンの実験成功から実装化まで二年間。その頃すでに第七星命体が人間の生活に入り込み、Eとして研究を続け、すでに宇宙バックを開発し宇宙を航海していたその技術を応用しエンジンを成功へと導いたのではないかと思うのです。これは私たちの仮説、いや妄想とってくれて構わないのですが、第七星命体は何らかの事情で自分の星に帰る途中、たまたま地球へたどり着いた。人間はあと少しのところでエンジンを開発できるという

段階にあった。それを知った第七星命体は、自分の技術があれば開発は一気に進むと考えた。エンジンが完成すれば、地球から自分の星へ帰ることもできるかもしれない。第七星命体がどういう方法で人間に入り込んだのか。その個体がEの中にいたのか、それともEより前の世代が存在したのか、それとも分裂して一部が帰星し、一部が残ったのか、それはこれからの研究対象です。いずれにせよ第七星命体の性質はEや孫に受け継がれていた。もしかしたら、第七星命体は翻訳にも力を貸していたかもしれません。

Eと一緒に研究していたBや仲間たちはもとより、E孫の周辺も彼にどこか『異』なるものを感じとっていたことでしょう。が、第七星命体の血が流れているとは思いませんでした。しかし日記が届き、色々なことが結び付き、調べようとなったところで事件が起きた。そして、昨日、この彼があらためて気がつかせてくれた」

二人が目を輝かせている反対で、四人の理事は睡眠作用のある霧の中にいるかのように一言も発さなければ、動きもしなかった。

しばらくするとでっぷりとした理事がしきりに瞬きをして言った。

「仮にですよ。Eが第七だったとして、なぜ自分ではなくBに偽装工作をさせたんですか。そんなことをお願いしたら、自分の正体がBにばれてしまうでしょう。すでにBにばれていたのだろうか？　だとしても、なんだかそこがよくわからない。このこと、どう説明します」

「私たちは、Eが強制したのではなくBが自ら偽装工作を行ったと考えています」

教授は断言した。

「BはおそらくEに対し、大なり小なり疑念を抱いていた。なにかが違う、少なくともいいを感じていないとは思っていた。なぜなら昼夜問わずともに研究していたのです。Kよりずっと早く気がついていたでしょう。が、互いにエンジン開発に夢中でそんなことを気にしてはいられなかったし、おそらく害もなかった。Eと再会してBのなかで疑いは確信に変わった。が、自分以外もそれに気がついてしまった。Eがあやしいとなれば、ここぞとばかりに彼を叩く人間が出てくる。彼らのまわりには真実への好奇心が人並み以上の人間が多い。つまり我々のような研究者たちです。調べられたらEになにか秘密があることがばれてしまい、Eの立場も危うくなる。BにとってEがライバルでもあったことは想像に難くありません。私はKとは違って、BにはEへの反発や嫉妬もあったと想像します。だからこそ、実証実験が連続して成功してまもなく研究所を後にしたのでしょう。それでも、Eのエンジンに対する献身は確かなものであり、Eに秘密があるからといって、それで彼がしてきたことを反故にしてよいわけではない。同時に、自分にとっても大切なエンジンが汚名を着せられるのを避けたかった。そこで彼は偽装工作をした。誰にも余計な詮索をされないように。」

しかし三十年後、思いがけないことが起きてしまう。発見された日記から、Eへの疑惑が湧

きあがつてしまった。それもBとEの孫同士が知り合いで、しかも同じ研究所の同僚ときた。

三十年前を再現するかのような展開です。しかし、EもBもすでに他界している。事実であろうとなかろうと、反論も偽証もできません。それでいて検証で用いられる技術は進歩している。作業着や工具に付着している分子から偽装工作したことが明るみに出て、Eの業績には疑いの目が向けられる。けれどそれは、誰がエンジン開発に最も貢献したのか、Eが嘘をついていたのではないか、ということであって、Eの秘密に迫るものではない。エンジンそのものは汚されないわけです。私は、おそらくBは、Eになんらかの疑いがかけられる日が来ることを予想していたのだと思います。なぜなら人の好奇心は衰えることなく、技術は進歩し続けるからです。どこかで何かが判明する。何かに気がつく。ありとあらゆる可能性がある。だからあのとき、Bはわざと髪の毛を残した。Eの業績に目が向けられるように。つまりBが阻止したかったのは、エンジンの開発者が誰なのかということではなく、Eの正体。そこに目が向かないように私たちは仕向けられていたのではないかと思うのです。私たちは蛭子・ブラッドショー論争という、誰が功労者であるかという点に意識をとられ、Eの秘密にまでたどり着いていなかった、そういうことです」

教授が「真実を明らかにしよう」そう言って学生の肩を叩くと、学生も嬉しそうに激しく頭を振った。

「しかしどうにも気になるのは、度々この資料に触れていて、第七星命体が嗅覚をもたないことも知っていたのに、どうしてこれまで気づかなかったのか……もちろん私が愚鈍なだけなのですが、なんだかこんなことを前にも考えたことがあるような……。きっと、少し考えて途中で気にしなくなってしまったのでしょうか」

神妙に考え込む教授に白髪の理事が言った。

「ちょっとよろしいですか。こちらも頭が鈍く恐縮ですが、誤解がないのか教えていただきたい。今お二人がおっしゃったのは、蛭子あるいはその孫も、第七星命体の可能性があった、ということですか」

「もちろん」

「そうです」

と二人が同時に答えると、尋ねた理事はうつむいて首を何度も横に振った。痩身、蝶ネクタイの理事はまるで二人の見解を初めて聞いたかのように目を丸くし、「何を言っている」「あり得ない」と騒いだが、でっぷりとした理事はいやらしくこう訊いた。

「嗅覚以外に、EあるいはEの孫が第七だったと推測できるものはないのですか」

すると学生は、

「映像から推測するに、第七星命体には四つの口にたくさん目の目がありますが、E孫はぼくら

と一緒に目は二つ、口は一つです。遺体は消失してしまったので検証はできていませんが、医療記録からそうした異変は確認されていません。でも壇の蓋が開くと白目を剥いた。多分これが第七星命体の目の反転と同じ——」

「それはすでに教えてくれたことだね」

でっぷりとした理事が遮った。

「続きがあります。第七星命体は四つの口を、人間にとっての、食べる、排泄する、話す、聞くに近い四つの行為で使い分けます。でも同時に二つ以上の行為はできません。話しながら聞くとか、食べながら話すとかは無理です。ここです。Eは同僚と一緒に食事することがなかった。式典後のバンケットも欠席。先生ならそんなことをなさいますか？ 実験したら腹が空きます。一度も一緒に食事しないなんて、そんな人ははじめから実験にもフィールドワークにも参加しない人ですよ。それにわかりやすいのは飴です。AやBの孫が差し出した飴をEの孫は一度も手に取らなかった。むしろ睨んだ。多分、Eの孫は彼らの話を聞いたり、自分が話したりする以上、食べられなかった。完全に食べられないのか、食べると話しにくい、聞きとりにくいという程度なのかはわかりません。それだけじゃなく『そんなもんいらねえし』って気持ちも混じっていたかもしれないと個人的には思います。皆と同じことができなくて屈折していたのかも。それに第七星命体には体毛がなくて、EもEの孫もスキンヘッド。これは遺伝かもしれ

ません」

三重顎を震わせながら「面白いね」と笑うと理事は上目遣いで鋭い視線を向けた。

「それで先生、Eが第七星命体の可能性はどれくらいあるんですか」

「昨日の今日の話で数字はまだ出せていません。詳細はこれから他の先生方や——」

「まあ、数字で表せない程度の可能性ですね。ということは単なる妄想にすぎないかもしれないし、一方で、真実であるのかもしれない」

そう言って、隣で腕を組みうつむいたままの白髪の理事に顔を寄せ、「これは大変な話だね」と再び笑った。そして、議論はまだかかりそうだと、秘書へ紅茶のおかわりを運んでくるようガラス戸を開けて伝えた。

白髪の理事は頭を抱えた。

「先生はこれからその突飛な仮説を立証なさるおつもりでしょう」

「もちろんです！」と教授が即答すると「一体何のために？」と理事も間髪入れずに聞き返した。

「論争は一九年も前に集結しているのですよ。仮にEが第七星命体だったとして、それが今更何だというのです。彼らの血は幸か不幸か絶たれたている」

「私たちはただ真実を知りたいのです。かつての研究者たちがそうだったように。『もしかし

たら』という考えを抱いた以上、何があったのか、そのことを突き止めたのです。それに、十九年前は誰がエンジン開発の中心にいたのかというちっぽけな話に過ぎない。しかし今回は異種星命体と人間の混種の可能性です。これが事実ならとんでもない発見だ。あなただって、今はどうか知らないが、以前は第一線の研究者でおられた。この気持ちを理解いただけるはずだ」

「私は今だって宇宙政策学の研究者だ。理事の椅子に座りたくて座っているわけではない。だからこそ忠告する。やめておきなさい。いまさら真実などわからないでしょう。当事者がいない。なにより、あなたは検証の過程で第七星に接触するつもりではありませんか」

教授はもちろんと頷いた。すると理事も深く頷いた。

「私が懸念しているのは、まさにそれですよ。仮にです。宇宙でも広く知られ、技術の一部を他の星へも提供している『地球エンジン』。それに関わったEという人間が、実は第七星命体だった可能性がある。そんなことを第七星をはじめ他の星に伝えてごらんなさい。奴らはきくと伝えてくれてありがとうと感謝するでしょう。なぜなら、これまで自分たちの成果を人間に搾取されてきたと主張して賠償を求めることができるからだ。真実だろうが妄想だろうがどちらでもよい。過去のことを蒸し返し、我々の不利益を招くようなことはやめていただきたい。先生は、今日の宇宙における我々の地位が、一体どれほどの苦勞と喪失の上に成り立っている

と書いていらつしやるのですか」

「私は何度か第七星命体と交流してきましたが、彼らは私たちのように利益を追求しません」

「それはないだろう」

「これだから話にならない」

「わかっていない」

理事たちは、嘲笑するか呆れた声を出した。が、教授は意に介さず持論を繰り返す。

その後も真実を知りたいと訴える教授と、余計なことはするべきでないと主張する理事たち、双方の意見は噛み合わないまま、過ぎた時間は長かったのか短かったのか。秘書は新しい紅茶を運んできたものの、緊迫した雰囲気なのか、お茶を置くタイミングがわからずヒールで立ち尽くしてしまった。

沈黙を破ったのは学生だった。

「第七星命体に接触してなんの問題があるんですか？ There Toolを使うんですから、歩み寄り機能が働いて、揉めごとになんて発展しないんじゃないですか？」

飛び交っていた言葉が勢いを失った。

「あ、そうか」

とでっぴりした理事は頬に手をあて、白髪 of 理事も、

「確かに」

と顎を一撫でして納得している。瘦身の理事も耳を掻きながら、

「それはそうだ」

蝶クタイの理事が、

「じゃあ、第七星命体へ聞いてみなさいよ。是非聞いてみてください。それではこれで解散」
と、大声で告げた。

我先にと部屋をあとにする理事たちに呆気にとられる学生の隣で、教授はいつまでも机上のツールを見つめていた。

IV

それからしばらくして、教授は学生と研究者数名を連れ、第二星と第七星の中間地点に設けられた十六クラブ専用の小惑星で会談をおこなった。

移動中、学生が尋ねた。

「蛭子たちに第七星命体の欠片かけらが入っていたとして、あれほど人間に同化できていたのにどうして嗅覚は身につかなかったんでしょう。それだけ感覚、特に嗅覚を学習することは難しいってことですか」

「そこなんだよ。当然すぎる疑問だから口にしていなかったが、そこにヒントがあるだろうね。蛭子賢では難しくとも、孫の段階ではおいというものを知覚できていても不思議はない。まあ、隔世遺伝で一世代スキップして習得の機会が失われたなんて可能性も否定はできないが、おそらく、君の言う通り、感覚を身につけることは極めて難しいのだろう。特に嗅覚は。でもだからこそ、なぜ難しいのかを明らかにすることで、感覚共有の道筋も見えてくるよ

うに思う。いつか私たちが相手のように道具を使わず距離や時間を完璧に計測することができるようになるかもしれない」

教授は学生に向かって笑いかけた。

「君からそのことを第七星命体に質問してみるといい。君が一番に気がついたのだから」

到着するまでの間、学生は第七星命体へどう質問しようかと、頭のなかで繰り返しシミュレーションした。自分の発見が相手にどう受け止められ、そのとき相手はどんな反応を見せるのか。またとない機会をしつかり目撃しなくてはと意気込んだ。

が、実際に第七星命体を目の前にすると、すぐには相手を直視できなかった。恐怖、あるいは想像とのギャップのせいか、つついいうつむいてしまう彼の目に教授の靴下が映った。こんなときでさえ頑なに占い靴下を履いている教授に感心する一方、こんなときでさえ今日の運勢が気になっている自分を恥じた。

しかし会談が始まると吉凶など全く役に立たないことがわかった。事前に参加者は人間五名、第七星命体一体と聞かされていた。学生は「会談」という言葉から、参加者はゆつたりと座って、たとえ自分だけは緊張で固まっていたとしても、教授たちと第七星命体はくつろいで意見を交わす姿を思い描いていた。しかし見慣れたテーブルや椅子はどこにも見当たらず、あるのは大型のモニターと高さが一四〇〜一五〇cmくらいで脚の長さが調整できる小さな机が数

台だった。第七星命体は絶えず紫とも緑ともつかない色に輝き、壁を這い、高脚の机を渡り歩いている。時折、膨れ上がるようにして移動する。だが、口を開いて発話するときは静止する。一方、人間は机に身体を預けたり、そこにデバイスを置いたり、壁に寄りかかったりして立ったまま話す。体の構造が違うから当たり前のことなのに、人間の視点でしか想像できていなかったことを学生はまたもや恥じた。そして人間が座らない理由はなぜなのか、あれこれ考えたがどれも外的な見解に思えてきて、こんな自分がこの場にいてもよいのかと落ち込んだ。すると、思わぬ角度から現れた第七星命体と目が合った。自分の目二つに対して、相手の沢山の目のうち五つほどが見合ったただけだ。しかし、相手の目が二つでないという当たり前のことに気圧された。目の前にいる第七星命体はやはり瞬きをせず、瞼にあたるものもない。教授や他の研究者もいつもに比べ瞬きが少ないように感じた学生は、事前情報にはなかったがひよっとすると当たり前の礼儀なのかもしれないと瞬きを我慢した。するとなぜか咳き込んだしまった。顔を赤くして失礼を詫びると、相手の目の一つだけが彼を見ていた。

ところが動揺しているのは学生だけではなかった。

会談は初めこそスムーズだった。挨拶を交わし、互いの日頃の協力に感謝を伝え合った。第七星命体は人間にとっての脳にあたる卵の黄身のようなプルットしたものを分裂させたり、ひとつに融合させたりしながら人間の話を黙って聞いた。そして人間が完全に話終えると、少し

時間をおいてから、発話用の口を通して話した。口が微かに開くたび、人間の耳には未知の音が届く。しかしそれは始まると同時に消え去り、ツールが変換した人間の言葉になって耳に届く。

教授は第七星命体に次の二つの点を確認したいと伝えた。第一に、蛭子賢やその孫と第七星命体のつながりについて。第二に、感覚共有技術の発展のため、互いの身体を共同研究することの賛否について。どちらも事前に議題として通知し、議論可能と好感触を得たうえで臨んでいた。あらかじめ質問事項を知らせるとは異星命体相手に随分と人間臭く、しかも旧式なやり方をする学生は驚いた。しかし同行する若手研究者に言わせると「十六クラブの構成員なんて所詮そんなもんだ」と素っ気なかった。ところが、そんな予定調和の会談が狂い始めた。

「まずは一点目、第七星命体と第二生命体蛭子賢およびその孫とのつながりについてご意見をお聞かせいただきたいと思います」

相手はそれには答えず、過去の事件の謝罪をはじめた。質問をはぐらかすための時間稼ぎではなく純粹な謝罪だとその場にいる誰もが感じた。教授が「すでにじゅうぶんな謝罪をしてくれました」と伝えても相手の謝罪は終わらない。あまりに長いので研究者の一人は「もうやめてください。過去の事件を蒸し返すために集まったわけではないのですから」と慌てた。

しかし相手が口を開く度に耳に届くのは、エンジン名まで変更させて申し訳ないとか、五つ

もの若い第二星命体の未来を奪ってしまったとかそんなことばかりだった。それを押し問答のようだと思った学生は、第七星命体に人間、それも謙虚な類の人間に似たものを感じ、親しみを抱きはじめた。

反対に異星命体との交流に慣れている研究者たちは違和感に包まれていた。ツールの歩み寄り機能では互いが目的を達成するための有意義なやりとりが生まれる。意味をなさない会話は自動で軌道修正される。それなのに今繰り広げられている会話は噛み合っていない。これでは会談する意味がない。噛み合わないから揉めごとにはならないが、徒に時間が過ぎていった。

その後も不毛なやりとりが続き、学生もこれは押し問答にもほど遠いと考えをあらためた。

そして皆、ツールが故障したのではないかと疑いはじめた。なぜなら第七星命体の長い話に對して、人間の耳に届く翻訳があまりに短いからだ。相手は長々と喋っているが、耳に届くのは「あつてはいけないことでした」「その後の技術開発を急いでくれた十六クラブや研究者には感謝しかない」と一文ずつ。一部しか訳されていないように思える。しかし黙って相手の話に耳を傾け、時々相槌を打つ教授と、何より話を続けている第七星命体を前に他の誰も疑問を呈することはできなかった。それに皆、心のなかでこう思っていた。たとえツールが故障していても、教授はツールに頼らずに第七星命体の話がある程度理解できているのだろう。そして、相手の長い発話はもしかすると人間にとっての発話ではないのかもしれない、と。

ようやく沈黙が訪れた。学生たちは固唾をのんで次の教授の言葉を待った。しかし、口を開いたのは再び第七星命体だった。交互に話すという決まりなどないのだが一体いつまで相手のペースにのせられるのか、いつになったら本題に持ち込めるのかと全員が気を揉んだ。

「第七星も第二星も水を愛しています。水は喜びです。きっと二一四〇年の事件の個体も水に喜んでいたでしょう」

一人の研究者が頭を抱えた。教授は声を出して笑った。

「もう過去の話はやめましょう。私たちには『水に流す』という言い方があります。過ぎたことにいつまでもとらわれず、なかったことにするという意味です。お互いにそうすべきです」
「第二星の水と私の水は違う。あの個体はそれがわからなかった。だからあんな事件を起こした」

流れに逆らい続ける相手に教授はただ目を細めている。学生にはその様子が、相手を嘲る気持など微塵もない、満たされている人の幸せな表情に見えた。一方、研究者たちは苛立っていた。実りのないやりとり、いや、やりとりとは言えないこの状態をどうして教授は受け入れるのだろうか。なぜ相手のなすがままであるのか。研究時間を削ってこの会談に参加したことを後悔している者もいた。異星命体を理解できていないと自信喪失気味になっている者もいた。教授が聞く側に徹しているせいで相手の気が大きくなり、謝罪から言い訳に変わったと憤然と

している者もいた。

「三万五千時間に一度の一時間が現れ、あの個体はけぬを出したのです」

学生は話の内容がよくわからなかった。それはまわりも同じらしく研究者たちも顔を見合わせた。

「しかし、それだけではけんを出す条件にはならない。第二星命体にけんぬなどない。だから第二星命体Eから派生した個体が第七星命体のなにかにあった可能性は否定できないでしょう。あの事件が起こったということは、そういうことなのかもしれません。あの個体のことを完全には悪く言えません」

第七星命体の口はまだ動いていた。相手にかぶせて話すのは最低のふるまいで、十六クラブの不文律のひとつだ。しかし教授は我慢できなかったのだろう。微かに口をもそもぞさせて相手に近づいた。相手の何十という目が教授を睨んだ。学生は驚き、研究者たちは争いに発展するかもしれないと身構えた。相手の口が完全に閉じるまでなんとか持ちこたえた教授は喘ぐように声を発した。

「けんぬ？ あ、ケンだろうか。もっと詳しく聞きたい。聞かせてください。一時間とは、ケンとはどういうことです。何のことです。蛭子賢ですか？ ケン・ブラッドショーですか？ それともほかのけん？ ける？ 一体何だろう……。彼らは当時すでに亡くなっている。ケン

を出す。出す……。ん、ひょっとして、あなたがたは故人を蘇らせられるのですか？」

相手が口を開こうとすると、教授は両手を大きく広げて制した。

「ちょっとお待ちください」

教授は慌てて机に戻ると置かれているツールに触れた。それに気がついたのは戸惑って頭を掻いていた学生だけで、研究者たちは謎の言葉に夢中になっていた。

教授は仕切り直すように前を向き、ノートを広げペンを持つと姿勢を正して言った。

「私たち第二星はあの事件を振り返るためにここにいるわけではありません。皆さんのお気持はじゅうぶんに理解しています。ですが、なぜあそこまで悲惨な事件が起きてしまったのか、その背景に第二星命体の蛭子賢およびその孫と第七星命体のつながりが関係しているというのなら、是非教えていただきたいのです。いまおっしゃった『ケン』とかいうものは一体何ですか。それから第七星における水、三万五千時間に一度の一時間というものもあわせて、是非教えていただけないでしょうか」

するとさっきまでの嘯み合わなさから一転、相手はいま初めて教授の言葉を聞いたかのように、まさに求められていることを話しはじめた。

第七星命体が語ったことは次の通りだ。

第七星の水と第二星の水は似ているようだが違う。人間にとっての水が絶えず「流れる」ものであるならば、第七星におけるそれは原則「とどまる」ものだ。第七星には、「水の根」と表現するにふさわしい植物の根のようなものが星中に張り巡らされている。四方八方に枝分かれして、根によって空間は区切られる。それぞれの空間は第七星命体の個体ごとの居場所として機能する。第七星命体に個体という概念はあるが、核の中に複数の個体の意識を融合させることもできる。ところが「私たち」という概念はない。個であり、複数であり、全体であり、一部だ。が、核の中で意識が混じり合うことはあっても、複数個体で行動を共にすることはなく、第七星では常に「水の根」によって互いが隔てられている。つまり個体と個体が物理的に接触することは起こりえない。根のなかには水が溜まっていて、それが星の振動によって僅かに揺れることはあっても、根が破裂して水が噴き出したり、漏れたり、染み出すことはない。

しかし、この水の根は三万五千時間に一度、一時間だけ枯れる。脆くなり、粉々になる。それを第七星命体は「動く」と捉える。根の中に溜まっていた水が動き始める。人間に馴染みある表現にすると流れていた水が、やがて蒸発し、根が崩れ、空間の隔たりがなくなる。すると自然、個体は個体を意識しはじめる。他の個体の存在を感じとった第七星命体は、普段は人間にとっての脳にある「けんぬ」（何度聞いても「けぬ」「ケンめ」「けんぬ」と微妙に違う音に聞こえたが、教授は後日これを「蹠」と訳すことにした）を伸ばして、他の個体に触れよう

とする。人間にとっての生殖行動に近いと思われるが複雑な運動ではなく「蹠」で他の個体に触れるだけだ。が、触れるといってもそれは人間では耐えることができないほど強い力で相手に「蹠」を叩きつける。「蹠」は意思を持つように跳躍する。

これから話すことは「仮定」に過ぎないと断った上で、第七星命体はこう続けた。

事件現場となった宇宙船の廊下の天井はアーチ状でガラス張りになっていた。そこには、第二星にとっての水が「動いて」（正しくは流れて）いた。侵入した第七星命体はこれを水の根が動いている、つまりまもなく枯れはじめると錯覚した。第七星命体は水が枯れると本能的に興奮する。とは言え、エントランスや廊下にいる限りでは、やや気分が高揚する程度だった。ところがこの個体はダクトへ進んだ。すると第七星命体の欠片が流れるE孫の気配を感じとった。第二星の船に他の個体がいるとは想像だにしない。そもそも、第七星命体にとっては同じ空間に他の個体がいるという状況自体が稀なこと。しかし偶然にも、第二星の船の中は第七星命体にとって疑似的な第七星、それも水の根が枯れたときの第七星と化した。水が「動き」、他の個体をそばに感じる。そして実際、通常の第七星には存在するはずの「水の根」そのものはどこにも存在しない。つまり枯れた状態。第二星命体にとって普通の船内が、第七星命体にとっては三万五千時間に一度の第七星になった。錯覚した侵入者は、反射的に「蹠」を出し、他の個体を求めてそれを叩きつけた。激しくしならせて相手を探したのだろう。三万五千時間

に一度のそれは、ちょうど一時間続く。襲撃そのものも一時間続いた。十六クラブの星命体のなかでも四番目に脆いとされる第二星命体に一時間ぶつ通して叩きつけられ、「消失」と表現するしかない状態になる。乗組員五名の身体の名残は飛び散った血液と体液だけで、それ以外は跡形もなく塵になった。では、どこにもう一体の第七星命体があったのか。今のところ、特徴から推測するに、Eしか考えられない。驚くべきことだが、信じられないが、その可能性が高い。ではなぜ、Eに第七星命体の欠片があったのかと言えば、それはこれから明らかにするだろう。

しかし、はっきりしないことがある。事件後、裁定や検証の場でこうした仮説を述べたような気がするがどの資料にもそんな記録はない。考えるにとどめていたのかもしれない。どうにも記憶が曖昧だ。事件の後、優先されたのは二度とこうした事件が起こらないようにすることで、そのためには徹底した掟の周知と技術の開発が必要不可欠だった。十六の星が一丸となってそれに取り組んだが、一方で、なぜあの個体が襲撃に至ったのかという原因の究明がおろそかになったのだろう。第七星命体が目的を遂行することしか知らなかった時代ならば、背景は明らかにされただろう。しかし、宇宙には仮定が散らばっていて、目的は必ずしも達成されず、ときに遂行する必要もないと私は知ってしまった。しかしそれは言い訳に過ぎない。あらためて謝罪したい。申し訳なかった。

第七星命体の長い説明が終った。人間たちは相手の話を遮らぬように注意したが、本当はすぐにでもあれこれ質問したかったし、議論したかった。

それからしばらく、異星命体の混種の可能性について熱っぽい議論が交わされ、次第に、性急な研究は互いにとって良くない、倫理上の問題もあるし互いに苦痛が生じることだけは絶対に避けなくてはならないと落ち着きを取り戻し、結局、十六クラブ本部の研究施設を借りて本格的な共同研究を行うかどうかは決まらないまま、次回の会談を随分と先に約束してそれぞれの船へと戻った。

発射を待つ宇宙船の中、何度もシミュレーションしたはずの質問をできなかった学生は落ち込んでいた。前方の教授を見ると、会談の内容をまとめているのか、キーボードを打ち、ペンを走らせ、忙しく手を動かしているが、どこか覇気がないように感じた。それを見る学生の表情も曇っていた。船内にピーピーピーと、第七星命体のツールがシャットダウンするアラウンスが流れ、それに呼応してこちらのツールも自動でシャットダウンした。教授は疲れていたのだらう。それからほどなくして眠りについたようだった。学生も体を丸めるようにマットに沈み込んだ。

学生が目を覚ましたとき、教授もほかの研究者もまだ眠りのなかだった。学生は声を出さな

いように大きく伸びをすると、あたりをうかがって音を立てないように自分のデバイスを開いた。

画面に表示されたのは数枚の写真だった。写っているのは会談中にThere Toolを操作している教授の後ろ姿だった。第七星命体が話そうとするのを手を広げて制したあの後だ。

学生はツールがよく見えるように画面を拡大させた。そして画面の中央をタップすると写真は動画になって再生された。

映っているのはツールの設定画面を操作している教授の手元。

【翻訳レベル 低、歩み寄り機能 オフ】
となっているのを、教授の人差し指は、

【翻訳レベル 高、歩み寄り機能 オン】
に変更していた。

それは学生が初めて目にするオプションだった。歩み寄り機能こそツールを使う最大の目的なのに、それをオフにできるとはどういうことか。当然、翻訳レベルを調節できることも知らなかった。すぐ思ったことは、会談で使われていたのは開発者向けの試用機なのではないかということだった。その証拠に、画面の下の方には【感覚共有機能（テスト段階）】というボタンも映っていた。

だが学生は困惑した。なぜこれほど大切な会談に試用機で、それも翻訳機能は低レベル、歩み寄り機能はオフと性能を落とした状態で臨んだのか。「感覚共有機能」をテストしていたのならまだしも、この機能はオフのままだった。わかることは、わざわざ機能の一部を制限して会談に臨み、それを途中で変更したのだから間違っただけであのツールを使っていたわけでも、設定ミスだったわけでもないということ。教授は敢えてそうしていたのだ。しかし、それはなぜか。学生は延々と考えた。

映像に食い入る学生を、いつの間にか目を覚ました教授が振り返って見つめていた。

（歩み寄りを制限するよりも先に、人間と人間の歩み寄り機能を導入すべきかもしれない。いや、それではミイラとりがミイラになる。個別に作用するように変更して……）

教授は学生から目を離さずに考えた。

しかし、彼が顔を顰め、腕を組み、頬杖をつき、額に手を当てる様子になにかを思い出すと、すこし微笑んで、再び夢のなかに戻った。

オリジン
Origin

2026 年 2 月 27 日 発行

著 者 菅 原 侑 子

発行所 コッコ文庫

<https://kokko-books.com>

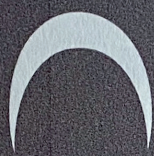
装 丁
DTP
製 本

コッコ文庫

© 菅原侑子 2026







origin

オリジン

